師範學校

國文教科書

本科用

修正十八版

巻五

375.9
Yo19
資料室

42575
教科書文庫
4
810
51-1919
20003
02267

資料室

375.9
Y019

文部省檢定濟
大正八年一月十日　師範學校國語科教科書

吉田彌平編

本科用

師範學校國文教科書

東京　光風館藏版

卷五

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 14269 圖書

師範學校 國文教科書 本科用 卷五

目次

一 櫻花と日本人……陸羯南 一頁
二 妹にさとす（候文）……吉田松陰 一五
三 月雪花……芳賀矢一 二七
四 世界の四聖 その一……高山樗牛 三五
五 世界の四聖 その二……高山樗牛 四七
六 上古の文學……五三
その一 祝詞……五三

その二　歌謠……五六
その三　歴史……六一
七　獨逸の對外策……六六
八　平和の巴里……島崎藤村　七八
九　奥の細道……松尾芭蕉　九一
一〇　花の雲（俳句）……九五
一一　舊師に懷を述ぶ（候文）……賴山陽　九六
一二　賴山陽その一……朝比奈知泉　一〇四
一三　賴山陽その二……朝比奈知泉　一一三
一四　知己難……德富蘇峰　一一八
一五　ベスタロッチ……澤柳政太郎　一二四

一六　平安時代の文學……一三四
その一　和歌……一三四
その二　日記……一四〇
その三　物語……一四四
その四　草子……一四九
その五　歴史……一五三
一七　日本畫……藤岡作太郎　一六一
一八　狩野芳崖……岡倉覺三　一六九

附錄

第五編　言語
一　言語の發達……一

二 口語……五

廣島大學圖書之印

師範學校 國文教科書 本科用 卷五

一 櫻花と日本人

陸羯南

陸羯南
名は實。
新聞記者。
明治四十年歿
才年五十一。

吾人日本人一たび自ら吾人の位置を顧念するときは、奇妙・神妙・妙不可思議にして、深く自ら崇敬し、先天に有する自尊の氣象をして更に一層自尊の念を喚起せしむるものあらん。試に亞細亞若しくは歐羅巴なる大陸人の眼より此の一小國の位置を視んか、蕞爾(サイジ)たる絶海の孤島たるは呂宋・ジャヴァと何ぞ擇ばん、ボルネオ・スマトラと何ぞ擇ばん。乃

蕞爾 小サキサマ

ちセレベス乃ちニューギニーと亦復何の異なる所ぞ。然るに獨り日本人と稱する一族の居住する諸島のみ數千年來鞏きこと磐石の如き邦家をなし、美しきこと春花の如き文明を發し、今は則ち世界の人齊しく東天に旭光を仰ぐ。是誠に奇妙・神妙・妙不可思議と云ふべきなり。

鞏き　ゆぎり つよ き かた

更に日本人と稱する一族を檢せしめよ。其の身幹を見れば、未だ嘗て他の東方諸島の民に異ならず。其の體重を問へば、亦未だ嘗て他の海東諸方の人に異ならず。更に之を泰西の國民に比すれば、兩つながら與に一籌を輸するなり。而して其の勇敢なる氣象を視れば、諸島は論なし、他の亞細亞の大陸人を壓して、岸として歐羅巴人の前に立てるなり。

一籌を輸す　スコシオトル。ヒケヲトル。

岸　カドカド　キサマ。

彼や海島諸方の民、安ぞ正義の食色より重きを知らんや、また安ぞ仁愛の斯民に周からざるべからざるを知らんや。亞細亞の大陸は孔子に聽き、釋迦に聽き、歐羅巴の各國は摩西に聽き、耶蘇に聽きて、僅に之に傾向すれども衷心の誠は從はず。而して此の日本人は孔子と釋迦とを借らず、摩西と耶蘇とを待たずして、數千年の古より正義の爲には水火をも避けず、仁愛の爲には身家をも顧みざる天性を稟有せり。審美の情と高尚の氣との富贍なるは文化の邁等なる邦國に於て始めて之を見るとは目今の通論なり。而して此の日本人は先天的に高妙不可言なる審美の情と一種不可及なる高尚の氣とを賦享せり。是誠に奇妙・神妙・妙不可

審美の情　物ノ美ト醜トヲ識別スル心。

富贍　フウセン　ユタカナコト。

邁等　スグレルコト・優等。

賦享　フキウ　ウマレナガラニシテウケタモノ

並鑣（ヘイヘウ）クツワヲナラブ。

索然（サクゼン）興味ノキハテタルサマ。

塗抹含糊（トマツカンコ）ノケヅリヌリツクルコト。

端倪（タンゲイ）オシハカルコト。ウカガヒ知ルコト。

思議と云ふべきなり。

然るに世に不快の説あり、日本人の秀靈斯くの如しと雖も、規模の小にして器局の狹なるは終に大陸人と比肩して立ち並鑣して馳する能はず。例へば日本の繪畫の如き、就いて之を看れば鮮妍可憐ならざるにあらざれども、離れて之を望めば索然平板興味なし。之に反して歐羅巴の畫圖は、就けば則ち塗抹含糊たゞ丹走り青迸るを看るのみなれども、望めば則ち陸離光怪幾ど端倪すべからず。例へば日本の家屋の如き、四疊半の數寄屋内に風致を極むるは大陸に求めて無き所なれども、夫の歐亞の大廈高樓、上に萬人を坐せしむべきが如きは此の國に於て見るべからず。又例へば日本人の國に處するが如き、快刀亂麻を斫り、談笑の間に大事を決する技倆は大陸人の驚嘆するところなりと雖も、夫の大陸人が遠視始終を照し、百年の大計を策定する器識に至りては、到底日本人の企及する所にあらず。又々例へば日本の詞章の如き、紅楓の河に浮べるを看て「渡らば錦中や絶えなん」との錦心は横溢すれども、「黄河入海流」といふが如き宏思は動かず。是他なし、規模の小、器局の狹なるに坐するなり。是遂に奈何ともしがたし。」と。嗚呼是果して日本人の天性なるか、將習の以て然らしむるものなるか。思うて而して得ず、怏々たる間久しく此の説を聽く。頃日偶、櫻花の爛漫たるに會ひ、一日花を上野に賞して、豁然一覺、胸

渡らば錦　立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなん。讀人不知。古今集。

黄河萬里　白日依山盡、黄河入海流。欲窮千里目、更上一層樓。王之渙。唐詩選。

翻倒＝心ヲトリミダヘス。

屈原＝楚ノ文章ノ祖。
陶潛＝陶淵明。

ブーランジェー
佛國の將軍。(1837-1891)

標致＝高ク趣奇量ノ好クコト。

宇頓に朗なるものあり、喜心翻倒言ふべからず。乃ち翰墨を呼びて之を世に問はんと欲す。

人の物を愛するや、概ね其の人の性行に近きものを求めて之に就く。故に「見其友、知其人」と言ふ。友何ぞ獨り兩性人類の儔のみに限らんや。其の親愛なる所は鳥獸・草花も亦一種の友たるなり。試に視よ、二公の的皪たる梅花を愛し、豐公の夭々たる桃花を愛せしが如き、以て二公の人となりを察するに餘あり。屈原の幽芳なる蘭を愛し、陶潛の高逸なる菊を愛せしが如き、二子の懷抱を想見するに足り、ブーランジェーの標致ある石竹を愛し、ビスマルクの空濶なる園林を愛せるが如き、二人の襟度も亦此に躍出せるにあら

ずや。個人の好愛する所以て其の人の如何を視ることを得ば、多數國民の好愛する所は亦以て複雜なる民衆の特性を斷ずるを得べきなり。此の眼を以て諸國民の好尚を視んか、薔薇を愛する歐羅巴人、蓮花を愛する印度人、牡丹を愛する支那人の特性は自ら判定するを得べく、而して櫻を愛する日本人の如何も亦以て知るべきなり。

然れども梅の如く、上古に無くして後に渡來し、以て國人の愛好を分つものあり。杜鵑の如く、上代に惡まれて後世に愛せらるゝものあり。故に櫻を愛するを以て日本人の特性なりと斷ぜんと欲せば、先づ日本人は上古より果して之を花王として愛好せりや否やを見んことを要す。而して

余の翻倒して喜ぶ所は、上古草昧の世よりして之を花中の花として賞せしに在り。蓋し我が國當時の俗は禽蟲・草木の何れを問はず、其の中の最も著しきものを見れば、其の一類の總名を以て之を特稱せり。例へば木材中の槇の如き、上古人民の屋材として其の需用最も多かりしかば、乃ち之を呼びて「眞木」とし、鷲は飛鳥中最も鷙悍なるものなれば、之を呼ぶに「眞鳥」を以てし、爬蟲の中最も忌避すべき蝮蛇を見るや、乃ち呼ぶに「眞蟲」を以てせり。櫻花を命じて「木の花」といふ、また之を以て眞箇花中の花とするに外ならず。あゝ寔に寒暑その中を執れる大日本の春山には古より百花開けり。而して特に此の一花に與ふるに「木の花」の稱を以て

するは、猶是此の人類を尊稱して萬物の長となすが如し。愛の極なり、尊の至なり。且や此の「木の花」を愛好せしは、上古も實に上々の遠きより來り、夫の瓊杵尊の御世には一世の好尚は早く已に此の花を認めて百花の王としたりしなり。卽ち當時天下第一の麗人世に生るゝあれば、之に負はしむるに木花開耶姫の名を以てせるにて知るべきなり。

櫻花（武藏小金井）

難波津
難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花。

爾來姿貌なり才德なり、凡そ世に秀絶したる人に會へば則ち比するに此の花を以てせしは、夫の三韓の王仁博士が難波津の歌に、仁孝明哲の大鷦鷯尊を「木の花」に擬し奉りしを以て其の一例とするを得ん。又其の花を「さくら」と稱するも上古に發せしものならん。九春の天艶陽の空に妍を競ひ芳を爭ふ花は十百を數ふべきに、獨り櫻に「開麗」卽ち「さくら」の稱を與ふるもの、亦「木の花」と名づくると同一意、之を夫の妍麗なる一貴人を木花開耶姫と稱するに視れば、「さくら」の命意は略〻明かなり。我が邦人が愛櫻の好尚は斯の如く古く、中頃支那の文物我が國の上流社會を風靡したりと雖も、未だ牡丹を以て櫻に代へざるなり。次いで印度の宗教

什り種。

空蟬の
八田知紀の歌。

含和
皇路當二清夷一含レ和吐二明廷一宋の文天祥の正氣の歌。

我が國の貴賤上下を一化したりしが、未だ蓮花を以て易へざるなり。歌を詠ずるものは萬葉以來二十一代集、累千百萬の什、皆花を以て櫻を表し、封建の世武士を人中の人と尚べば、則ち之を稱して「花は櫻木、人は武士」といふ。日本人の日本人たる自尊の氣象の特名たる「やまと心」を說明して、「朝日に匂ふ山櫻花」と斷定を與ふるに逢へば、萬口同音唱和して異論あらず。而して其のこれを愛する極、

空蟬の我が世のかぎり見るべきは、
あらしの山の櫻なりけり。

といふに至りては、人は「含和吐明廷」の想あり。日本人の古來今往、櫻を以て生命となすや實に斯の如きものあり。是

果して如何なる人種なるか。

今試に審美の情より支那・印度及び泰西なる三大人種の特愛する花を執りて、これを日本人の生命とせる花に比觀せよ。一輪の牡丹、一朶の薔薇、一莖の蓮花は皆瓶中に挿むに堪へて、艷鮮甚だ愛すべけれども、獨り櫻に至りては、一瓣の花は以て目を寓するにだに足らざるなり。是牡丹・薔薇・蓮花の以て櫻花に勝れる所なり。然れども牡丹の如きは富贍と雖も俗氣あり、薔薇の如きは明媚と雖も覇氣を藏し、蓮花の如きは飄逸と雖も元氣を存せざるなり。而して櫻花は獨り此の外に立てる感あり。且其の牡丹の俗氣を帶ぶるは之を愛する支那人の吝嗇に似たるあり、薔薇の覇氣を藏するは之を喜ぶ泰西人の峻酷に似たるあり、蓮花に元氣なきは之を好める印度人の獨立の氣象に乏しきに似たり。「見其友、知其人」の格言より推せば、三大人種好愛の標的は則ち其の特性の一徴證に非ざるを得んや。

且尚牡丹・薔薇・蓮花につきて言ふべきものあり。此の種の花は是小瓶中の觀あり、小園中の觀あり、小丘上の觀あり、小池中の觀あり。之を文章に譬ふれば何れも小品の種なり、雄壯宏蕩なる大文學にはあらざるなり。櫻花は則ち之に異なり、一瓣はいふに足らずと雖も、一枝は則ち觀るべきなり。而して一樹の好きは一枝の好きより好く、十樹の好きは一樹の好きよりも好し。乃ち百樹乃ち千樹所謂「一目千

本」多々益々辨ずべし。且其の花や、咫尺の間にこれを見れば未だ大いに異彩を發せず。百歩にして之を觀れば白雲の空に起るあり、千歩にして之を望めば紅霞の峰に靉くあり。光彩陸離、天地の間に磅礴せり。是寔に花の至大至壯・最妙最美なるものなり。而して我が邦人は百花に選みて獨り之を採り、殊寵絶愛以て其の生命となす。此の如き民人にして豈規模の小、器局の狹なる理あらんや。然り再び吾が日本國の位置を視よ、呂宋・ジャヴァ・ボルネオ・スマトラ・セレベス・ニューギニーと、將復何の選む所ぞ。而して吾人獨り諸島の中に於て數千百年斯くの如き邦家をなし、斯くの如き文明を致し、今や世界の大陸人をして回頭一時、齊しく東

潔齋＝タヨリ
ヨクヒ物イミウ
ヒンコト。

妹 吉田松陰の長妹千代子。この文は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄に在りて贈りしものなり。

吉田松陰 名は寅次郎。長門の勤王家。教育家。安政六年(二八五)斬らる年三十。

天の旭光を仰がしむるもの、如何ぞ規模の小、器局の狹を以て能く之を濟すを得んや。然らば則ち今の時に當り、國人のなす所往々褊狹細小の譏あるものは、習にして性にあらず。夫の千樹萬樹九春を司り、絢爛陸離天地の間に磅礴するものは、汝が父祖先人の志なり、汝が後世子孫の事なり。花を觀て感悟する所あり、この文を作る。(鵜南文集)

二　妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にていたゞき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにてよろし

き事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日にいたゞき申候。

そも〳〵觀音様信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委

大乘＝教育ノ在ルモノニ説ク教ヘニシテ佛教ノ眞理ヲ悟ルモノ。

小乘＝教育ノ無クモノ凡人ニ説クモノ。

ちんぢ 方言、微塵などの意。

細申進ずべく候。法華經第二十五の巻普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、縄目にかゝり候へば忽ちぶつ〳〵と縄が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人へ

上根ハ教育アル人
下根ハ教育ナキ人凡人

の教と定めこれあり候。小乘にて申候へば、觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは人に信をおこさするためなり。信を起すとは、一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば何事に臨み候うてもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に、如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣ひはなし。されど、初より凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申しきかせても、少しも耳に入らぬもの故に、かりに觀音樣を拵へて人の信を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。これにつきて、法華經に都上りの喩これあり至極面白く候へども、事長ければ略し申候。さてまた大乘と申す方には出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その

都上り
法華經第七化城喩品。

一士道莫大於義義因勇行事
因義長
一士行以質實不欺為要以仍
詐文過為恥光明正大皆由
是出
一成德達材師恩友益多
百級君子慎交游
一死而後已四字言簡而義
該堅忍果決確乎不可拔
者舍是無術也

二十一回猶士孫

吉田松陰筆蹟（士規七則の内）

天竺王　迦比羅城主淨飯王。

初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てゝ、年二十五の時位を棄てゝ山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。（これにも色々有難き話があれども事長ければ略す。）さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それより世の人を教化せられたり。これが

此ノ世ノ人ノ反問ヲタスケテヤルト云コトデ御座候コト

即ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することに御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の、孔子のと申す方々は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすればありがたがりもし、畏れもするなり。果して死なぬに候はずや。（孔子の教もやはりこの通に候へども、事長し、略す。）死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通には候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

人間萬事 淮南子に見ゆ。

さてまた「禍福繩の如し」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。（このわけは物知に問うて知るべし。）拙者など人屋にて死ぬる事に候へば禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも殘り、かつがつ死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮（さてり）一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の効驗もなき事に、觀音に賴みて福を求むるやうの事は、必ず〳〵無益に存候。

易の道 天道虧し盈而益し謙。

七人兄弟
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
兒玉兵衛門妻
杉壽子
小田村素太郎妻
杉艶子
杉美和子
久坂義助妻
杉敏三郎
ふざま 方言、運の意。

尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分不孝なる申條と御存あるべきか、こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いにきらふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはふざまのわろき人も隨分あるなり。然れば父母・兄弟の代りに拙者・艶・敏の三人が禍を引受くるにこそと思ひ

つめり結局

人日＝一月七日
上巳＝三月三日
端午＝五月五日
重陽＝九月九日

山宅　杉常道隱棲の地。萩城の東方護國山麓に在り。

候はゞ、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。且杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却て杉が氣遣なるものなり。　拙者身の上は前に申す通、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様・母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なる者にては候はずや。　去年も端午に客の多きを、人はめでたし〳〵と嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。

小太郎　兄民治の子。

もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し〳〵。　父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。　小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。　まして久坂などは猶以てのこと。　されば、拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申聞かさる方が肝要なり。　なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。　兄弟のうちに一人にてもふざまのわろき人あれば、あと

の兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかはりに父母様に孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勘辨候うて、小田村・久坂なんどもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をり〳〵御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。

高潔ニケダカキコト、無垢ニマジリケナキコト、ケガレナクキヨキコト、紫美ニヌリビ、ケダカクウツクシキコト、

芳賀矢一
國文學者。文學博士。東京帝國大學文科大學教授。慶應三年（一八六七）生。

神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。（俗簡襍輯）

三　月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない、日は仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して、大小の有象・無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔・無垢・崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最も

詩的情緒ハ詩ニテ表現スベキ情緒
情緒トハ智的判斷ヨリ起ル
感情ノ狀態ヲ云フ。
油然ト雲ノ盛ニ起ルサマ轉ジテ思
想感情ナドノ盛ニ起ルサマ
ニ用フ。

ふさはしい。この光に對しては誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒が油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる熱帶の椰子の陰、寒地の氷雪の家、眺める人の心は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ること。は、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。

うちむかふ 荷田蒼生子の詠。

「うちむかふ月は一つのかげながら、うかぶはちゞの思なりけり」である。

東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嘆嗟し、之を吟咏した詩歌は世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は云ふ「月

古往今來ノ意ヨリ今ニ至ル迄

花ならば 花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪ふるみ吉野の山。仙覺。

三千世界 宋の劉師道の詩。

は地球の衞星で全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも、一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや「花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて雪降るみ吉野の」といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく

瓊玉 美玉

眩 マブシク

汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺めはもとより美しいに相違ない、花の散つたのちの新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も靑葉もない冬枯の時に地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は決して我等の世界程樂しいものではないであらう。

閑寂 カンセキ シヅカニシテサビシキコト

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまゞ、どれを見ても美しいのが四季につれて咲きかはり、咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんばいかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花は必要である。棺槨を飾るに

も花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛しその清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は皆花に基づいた語である。古今・東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは各その特長がある。いづれを前いづれを後といふことが出來ぬ。

山櫻、花の下風吹きにけり、
木のもとごとの雪のむらぎえ。

花をし　年ふれば齡は老いぬ、しかはあれど花をし見れば物思もなし。　藤原良房。

山櫻　康資王母の詠。

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、
雲のあなたは春にやあるらん。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪、靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地の人は寸紅の、目を樂しませるものも持たな

冬ながら　清原深養父の詠。

笠は重し　謠曲葛城の句。

い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纒うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは古人の歷史がくはゝつて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまた
我をもゆるせ、秋の夜の月。

世々を經て　伊藤仁齋の詠。

年々歲々　唐の劉廷芝の詩。

高山樗牛　名は林次郎。評論家。文學博士。明治三十五年歿す年三十四。

月は古來の歷史を照す鏡である。

年々歲々花相似、歲々年々人不同。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見ていよ〳〵多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得たるわれ等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を傳へたるよ、如何に多くの追慕をわれ等に催さしむるよ。（月雪花）

四　世界の四聖その一

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテス・

釋迦、塞種族ヨリ出ツ故ニ族ノ名ヲトリテ釋迦ト云フ

佛陀ニ浮屠ト

人生ノ奥義ニ煩惱ヲ斷滅シテ涅槃ニ達スルコト。

跋提河

思索

基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳妻子を捨てゝ王城を逃れ、山林に隱れて道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒に思索

名目上ノ優劣

稱呼ノ上ニ於ケル優劣アリ

元々自體ヲイフ。古者、人ヲ謂ヲ異人トイフノ異ニ因リテ元ト其ノ元ト多数ニシテ其ノ元ニ非ザルトナリ。

歸依ニ安神律命。

木鐸
金口木舌、施ニ政教一時所ニ振以警ヒ衆者也。

の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てゝ相爭ふところは畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

釋迦（吳道子筆）

孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年

の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外其の風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊說を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。

孔子（吳道子筆）

大司寇　支那用ノ制。司法裁判ノ長官。

綱紀ヲ紊制ス。

春秋　經書。其ノ解釋ヲ傳ト云フ。

（公羊氏　穀梁氏　左丘明）

蕩然　法度ノ廢レ壞ルヽ貌。地ヲ拂フ　地ヲ掃フ。塵芥ヲ掃除シ盡クスガ如クニ無トナリタルヲ云フ。

或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に翻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからんや。」孔子答へて曰く、「天を怨

我ガ最國時代ニ支那戰國時ニ至ル　即チ下剋上ナリ。

陵夷。衰ヘンコト。陵

狂瀾ヲ既倒ニ翻ス　及ニ西狩見レ麟ニ。嗚呼吾が道ニ。スデニ行ケヨセテ来レル大浪ヲモトトサヨニ迄ス意。

躓跎　ツマヅキテ進マザル意。ヒキヅルコト。

子貢　長者。賢者。先生ヲ尊稱。

曾　嘗ニ。

史記。

怨レ天、不レ尤レ人。下學而上達。知レ我者其天乎。……君子病ニ沒レ世而名不レ稱焉。吾道不レ行矣、吾何以自見ニ於後世ニ哉。

曰、何爲莫レ知レ子。子曰不

曰、吾道窮矣。喟然歎曰、莫レ知レ我夫。子貢

天ニ得ズトモ天ヲ怨ミズ人ニ合ズトモ人ヲ尤メズ下ル人事ヲ學ビ上ル天理ヲ發明シテ之ニ達スルヲイフ

みず、人を尤めず。下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病ふ。吾が道行はれずんば、吾、何を以てか後世に見えんや」と。幾ばくもなく歿しぬ。時に年七十三。

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なりき。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず、倪諤の正議、其の稀代の雄辯と相俟つて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を揧め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ

假借 カス、ユルス、

倪諤 倪々諤々タリ、剛直ニシテミサヲヲ曲ゲザルモノ、

語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にありと知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾、一鷄を以てアスクレ

ステラクッ

アスクレピオス
希臘神話に、醫藥の神。アポロの子。

ピオスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生る。西暦紀元元年は實は其の生後四年に當るといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にて、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歷游し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐り

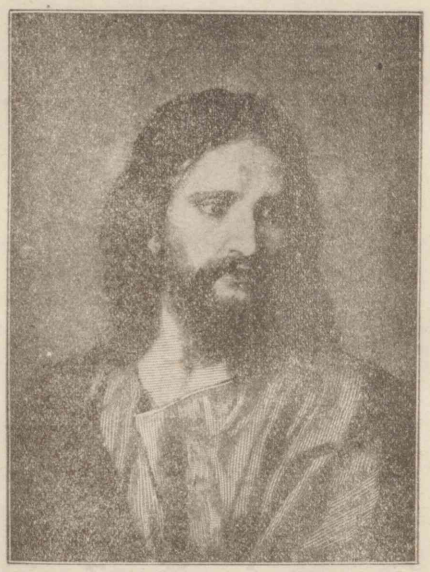
収斂 多ノ租稅ヲアツメ取ルコト。トリタテ。

淫祠 祭ルベカラザルアヤしキ神ノヤシロ。

に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被り、民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は齊しく偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。

基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等これを喜ばず、猥りに新法・異說を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼らを許せ。

彼らは其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサルムの女子よ、わが爲に哭くなかれ。唯己と己が子とのために哭け」。



基督

と。かくの如くして、基督は三十三年の短き生涯を以て十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物・事蹟の高大にして雄偉

轗軻不遇

轗軻ハ車行キテ利ナラザル貌。ヨリテ不仕合ノ意トス。不遇ハ時ニ遇ハザルコト。不仕合モ同。

なる永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を除きてはいづれも轗軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盗賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却て「わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さゞるべからず」と。基督は己を罪に陷るゝものゝために神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

五　世界の四聖　その二

高山樗牛

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

涅槃　サトリノ域。
NIRVANA.

觀ず　ヨクヨクノ注意シテ見ル　コマヤカニ識別ス。

身を修め　古之欲レ明二明德於天下一者　先治二其國一。欲レ治二其國一者　先齊二其家一。欲レ齊二其家一者　先修二其身一。欲レ修二其身一者　先正二其心一。欲レ正二其心一者　先誠二其意一。　大學。

涅槃　梵語ニルヴァーナ。寂滅・滅度などと譯す。

孝は百行の本　孝百行之本、衆善之始也。　後漢書。

後天ノ氣質　生後、経驗ニ基キテ得タル氣質　氣質ハ、傳染ニテ本性ノ善ナル　ニ對シ可ニ惡ニ、或ハ惡ニ化作ル

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを旨とす。夫人生は苦に始りて苦に終る。生老病死何れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして、即ち涅槃なり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば家自ら齊ふべく、家齊はゞ國自ら治るべく、國治らば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて治國・平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知德合一說なり。おもへらく、「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは、共に知識・道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なる

包括。カネ含セテ一ツニククルコト。

山上の垂訓 新約全書馬太傳五・六・七に出づ。基督猶太の祝福の山にて求道者に教訓を垂る。

ものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず、道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在り」と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。

曰く、「心の貧しき者は福なるかな。天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな。其の人は慰められるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな。其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな。其の人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな。其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人

梁木 ウツバリ。其大ナル ニ喩フ。

塵ノ小ナル ニ比ヒテ

沈淪 シヅミ沒ルコト、オチ入リテ落ハザルコト。

若し汝の右の頰を打たば、左の頰をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。僞善者の行に倣ふなかれ。隱れたるを鑒み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門は濶く、其の路は大きく、これに入る者は多し。嗚呼、いかに、生命に至る門は窄く、其の路は細く、これを得る

道念 道義ノ心

者の少きぞや。凡そこの訓を聞きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聞けども行はざる者は砂上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の精髄は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓に基す。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜凜として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆はこの教に憑りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺德の高大なること、何を以てか是に比せんや。（樗牛全集）

六　上古の文學

訓じテ　漢字ニ国語ヲアテテヨムヲ云フ

詩的美辭　詩ノオモムキアルコトバ。

壽詞　美詞（ヨゴト）ノ義ニテ壽ヲ祝ノ詞ヨイフ。續日本紀ニ古事ト見ユ。

その一　祝詞

上古の祭祀は即ち政治なり。故に政を訓じてマツリゴトといふ。敬神崇祖の民族が皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の動業をしぬび、よりて以て團結せるは、即ち我が建國の體裁なり。この時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せる詩的美辭ありてこの祭祀に伴ひしならん。壽詞といひ、祝詞といふもの即ち是なり。

祝詞は天皇即ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩、國民の幸福を求むるを以て主眼とす。國民が現世の福祉を求め、清淨を愛する風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代

祝詞式 祝詞ノ実ナルモノ。延喜式第八巻ニ見ユ。

語彙 コトバノアツマリ。

常磐ニ永久。

みかゝ 門ヲ美シルモノ

廿壯室 イカメシクオモオモシイコト。

の國民思想は、明かに我が祝詞式の祝詞にあらはれたりといふべし。

文辭上より祝詞を見んか、その語彙の數は甚だ多からず。「天翔り國翔り」「甘菜・辛菜」「常磐に堅磐に」「聞き直し見直して」「平らけく安らけく」「祓へ給へ、清め給へ」の如く對語を連用すること多し。こは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門開き、夕べには御門立て」「みかのへたかしり、みかのはらみてならべ」の類是なり。同一音・同一語を反復するは、對句の未だ發達せざる程度にありといはんよりも、一方に於て單調に失する嫌あると同時に又自ら莊重雄大なる風格を添ふる所以なりといふべし。もし巧妙なる對句を用ひ

純朴簡古 スナホニシテ、カザリケナク、簡潔ニシテ、こゝろヨシキコト。

大嘗祭
今の新嘗祭。

祝詞の用字例
集侍神主祝部等諸聞食登宣
高天原ニ神留坐皇睦神漏伎神漏弥命以天社國社登敷坐ニ皇神等前ニ白久

天つ御食の長御食の遠御食と。
天神ノ永久ト御神饌トニテノ意。長モ遠モ共ニ永久ノ義

ば、純朴簡古なる趣は即ち失はるべければなり。

大嘗祭の祝詞

集れる神主・祝部ども諸〻聞食せと宣る。
高天原に神留ります皇睦神漏伎神漏美命もて天社・國社と敷きませる皇神たちの前に白さく。
今年十一月の中卯日に天つ御食の長御食の遠御食と皇孫命の大嘗聞食さむ爲の故に、皇神たち相うづのひまつりて堅磐に常磐に齋ひまつり茂し御世に幸へまつらむとよさして、千秋の五百秋に平らけく安らけく聞食して、豐明にあかりまさむ皇御孫命の宇豆の幣帛を明妙照妙和妙荒妙に備へまつりて朝日の豐榮登りに稱辭竟へまつらくを諸〻聞食せと宣る。（延喜式）

長歌ハ五七五七……ニ終リ、五七七ニ終ル

旋頭歌ハ五七七ニ終ル

藤原 大和國高市郡鴨公村にあり。持統・文武兩帝十六年間の皇居。

柿本人麿 持統・文武二帝の頃の人、歌聖と稱せらる。

雄渾 筆力ノツヨクトトノヒテアルコト。

咄嗟ノ間 シバシノ間。チョウトノ間。

抒情詩 己ノ情ヲ述ベタ詩。

その二　歌謠

萬葉集二十卷は短歌四千四百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌二十餘首の大歌集なり。萬葉時代、委しくいへば藤原朝即ち持統・文武の朝以後和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは顯著なる事實とす。柿本人麿の作歌には長篇頗る多く、その歌雄渾壯大なり。上代の文學としての祝詞は古來の舊辭を敍し、傳說を述べて數百言を陳ねたるに、咄嗟の間に成るを主とせる歌謠は概ね五十言に滿たず。今や人麿は民衆共同の祝詞の形式を以て之を個人の抒情詩に應用せしなり。然れども人麿が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中に含有せし敬神崇祖

一瀉千里 川ノ流レノ急ナ勢ニ譬リ用ヒタリ。コヽハ歌ノ勢ニ譬リ用ヒタリ。

瀟洒 セウサイ。セヒヒヤヒ。サッパリトシタルサマ。

山部赤人 聖武帝の頃の人。人麿と並び稱せらる。

山上憶良 文武帝の朝遣唐使に隨して唐に入る。聖武帝天平五年歿す年七十四。

の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。山部赤人は人麿に比すれば、概して詩形の簡單を喜び、歌中の句法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。その長は瀟洒にあり、簡潔にあり。富士山の歌の如き、雲・雪・山・河等の語を用ひたるのみにて、高潔崇高なる風韻を帶ぶること富士山そのものに彷彿たり。これ亦祝詞の神を傳へたるもの。山上憶良に至りては、支那に遊べることあり、漢學に通じ、佛說を喜ぶ。詠ずる所、皆支那思想・印度思想に基づき、歌の序としては漢文の四六文を用ひ、儒・佛の影響最も顯著なり。

過近江荒都歌

萬葉集略解の一部を示す。

近江荒都ハ 近江志賀。
倭ニヨリ。
玉手次ハ 枕言葉。
櫻木ニ 繩綱ノ 枕言葉。
天雲ニ 倭ノ 枕言葉。
青丹吉ニ 平ノ 枕言葉。
天離ル 鄙都ヲ 離レタル所。
石走ル 淡海ノ 枕言葉。
泉川ニ 大津ノ 枕言葉。

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次畝火之山乃、橿原乃、日知之御世従、或云自宮 阿禮
座師、神之盡、櫻木乃、彌 繩綱 爾、天下、 所知食
ま、かみのことごつのさくのいやつぎつぎにあめのしたしろしめし
之乎、或云食来 天雨満、倭乎置而、青丹吉、平山乎越、或云虚見倭乎置、何 青丹吉平山越而、
こをそこをしみつやまをおこえて あをによしならやまをこえいか
方御念食可、或云所念 計米可、 天離、夷者雖有、 石走、
さまをておもほめせか あまざかるひなはあれどいはばしる
淡海國乃、樂浪乃、大津宮爾、天下、 所知食
あふみのくにの さざなみのおほつのみやに あめのしたしろしめし
兼、天皇之、神之御言能、大宮者、此間等雖聞、大殿者、

百磯城ハ 大宮ノ 枕言葉。
宴浪ハ 思賀ノ 枕言葉。
幸ハ 青ノ 畳。
大和太ハ 湖、和数ノ 湖。

けむ、ときめかしけるかみのみことのおほみやは、こゝとうたへどもおほとの
此間等雖云、春草之、茂生有、霞立、春日之霧
こゝといへども、はるくさの しげくおひたる かすみたつ はるひのきり
流、或云霞立春日香霧繁成奴 曲、百磯城之、大宮處、見者悲毛、或云見者左夫思母
る。

反歌

樂浪之思賀乃辛崎雖幸有、大宮人之、船麻知兼津
さゝなみの しがの からさき さきくあれど おほみやびとの ふねまちかねつ
左散難彌乃、志我能一云比良乃 大和太、與杼六友、昔人二、亦母相
目八毛 一云將會 跡母戸ヤハ
さゝなみの しがの おほわだよどむとも むかしのひとに またもあはめやも

時じくぞ「時ゲクハ其ノ時ノ節ニ非ズ・トキナラズ・ツネニ・ナドノ意」

ユリヨリ

金口 仏教ハ金口ナレバ其ノ言説ヲ金口ト云フ

富士山を望みて　　山部赤人

天地のわかれしときゆ、神さびて高く貴き
駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば、
渡る日のかげも隠ろひ、照る月の光も見えず、
白雲もい行きはゞかり、時じくぞ雪はふりける。
語繼ぎ言繼ぎ行かん、富士の高嶺は。

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ
富士のたかねに雪はふりける。

思子等歌　　山上憶良

釋迦如來金口正説。等思衆生如羅喉羅。又説愛無過

等思衆生　吾觀衆生無偏黨如

羅怙羅。愛無過子。誰不愛子乎。（最勝王經）

子。至極大聖尚有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子

乎。

宇利波米婆、　胡藤母意母保由。
久利波米婆、　麻斯提斯農波由。
伊豆久欲利、　枳多利斯物能曾。
麻奈迦比爾、　母等奈可々利提、
夜周伊斯奈佐農。　安賦ガ古来ノ

反歌

銀母　金母玉母　奈爾世武爾、　ニ見イモノガアラウカアレハシナイ
麻佐禮留多可良　古爾斯迦米夜母。（萬葉集）

その三　歴史

大化の改新、支那文化の輸入は自ら國運の進展を促し、茲に修史の事業は起り、地誌の編纂は企てられたり。その古事記・日本書紀は傳へて今日に至りたれども、風土記は多く亡佚せり。古事記は神代より推古天皇までの歷史にして、稗田阿禮の舊辭を諳誦せるを太安麿等が筆記せるものなりといふ。從つてその文は大體古くより口々に言ひ傳へたるまゝに寫せるものなるべく、日本第一の古典なり。就中神代の卷は神話・傳說・歌謠等に富み、最も趣味多し。日本書紀は漢文の國史にして、國文學としての價値は少し。

古事記の用字例
八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心共行稻羽時於大穴牟遲神負帶爲從者率往

稻羽の素兎

八十神各、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に行き

稻羽
因幡。

氣多の前
因幡國氣多郡（今は氣高郡）の一部にある岬。

淤岐
隱岐。

ける時に、大穴牟遲神に帶を負せ、從者として率て往きゝ。是に氣多の前に到りける時に、裸なる兎伏せり。八十神その兎に云ひけらく、「汝爲むは、この海水を浴み、風の吹くに當りて、高山の岑の上に伏してよ。」といふ。故其の兎、八十神の教ふるまゝにして伏しき。

こゝにその鹽の乾くまに〳〵其の身の皮、悉に風に吹裂かえしからに、痛み泣伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神其の兎を見て、「何ぞも汝泣伏せる。」と問ひ給ふに、兎白さく、「僕淤岐の島にありて、此の國に渡らまく欲りつれども、渡らむよし無かりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、「吾と汝と族の多き少きを比べてむ。故汝は其の族のありのこと〳〵率て來て、此の島より氣多の前

鰐ワニサケノコト

まで、皆列み伏してわたれ。吾その上を蹈みて走りつゝ數み渡らむ。こゝに吾が族と、何れ多きといふことを知らむ。」かくいひしかば、欺かえて、列み伏せりし時に、吾其の上を蹈みて、數み渡り來て、今地に下りむとする時に、吾、『汝は吾に欺かえつ。』と言ひ竟れば最端に伏せる鰐、吾を捕へて、悉に吾が衣服を剝ぎき。此に因りて泣患ひしかば、先だちていでましゝ八十神のみこともちて、『潮を浴みて風に當りて伏せれ。』と教へたまひき。かれ教のごとせしかば、吾が身悉に傷はえつ。」と白す。

是に大穴牟遲神、その兎に教へたまはく、「今疾くこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の花を取りて、敷散して、其の上に輾い轉びてば、汝が身もとの肌の如、必ず癒えなむものぞ。」と教へ給ひき。故教の如せしかば、其の身本の如くになりき。これ稲羽の素兎といふものなり。今に菟神となもいふ。

かれその兎、大穴牟遲神に白さく、「此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ。佩を負ひたまへれども、汝が命ぞ獲たまひなむ。」とまをしき。

太古より奈良朝に至るまでは、通じて我が國字なき時代なり。その間の年代頗る長く、一般文化の發達之を祖先建國の昔に比ぶれば、實に霄壤の差ありしなるべし。殊に隋唐と交通するに及び、支那思想は猛然として流入し、國民文學の上にも多大の影響を及せるを見る。然れども國字なき時代として、今は一括して之を上古と稱す。（國文學歴代選に據る）

霄壤ノ差
霄ハ天、壤ハ地ナリ。霄壤ハ天地ノ異ナリ其ノ相異ノ甚ダシキヲ云フ。

常套語
常套語とは常ん語

ホーエンツオルレルン　前の獨逸皇帝の家、フリードリヤヒ一世（1417-1440）を祖とす。第十二代フリードリヤヒ一世（1701）始めて普魯西王となり、第十八代ウイルヘルム一世（1871）始めて獨逸皇帝となり、フリードリヤヒ三世を經てウイルヘルム二世に及べり。

七　獨逸の對外策

「ホーエンツォルレルン家は常に能く時代の大勢を達觀す」とは、カイゼルの常套語なり。實に、ホーエンツォルレルン家歴代の國王は、民をして依らしむべく知らしむべからずとの方針を執り、國民は王室の指導に依つて動くべきものなるを主張し、國王自ら國是を定め、國民をして之に追隨せしめ來れり。然れども今次の大戰に至るまでは是がために國民怨嗟の聲を聞くこともなく、能く國民をして進むべき所に進ましめたりと稱せらる。此の如きは、畢竟、彼等が高處に立ちて、世界の大勢を察知し、國民をして能く此の大勢に順應せしめたる爲にして、カイゼルが家長的施政を以て自己の理想なりとし、此の如き國家組織が獨逸をして國際競爭場裏の勝利者たらしむる唯一の方法なりとするも、畢竟、此等の先例を追はんとせるなり。而してこれ獨り內治問題に於て然るのみならず、外交に於ても亦同樣なり。今、少しくカイゼルの對外思想に就いて研究する所あらん。獨逸は已に普佛戰爭によりて歐洲に於ける地位をつくり、且、國內に於ける統一をも成したれば、今後は、更に他の方面に向つて、種類の異なる侵略を試みざるべからずとは、カイゼルの根本思想なり。即ち、彼は商工業を振興し、經濟的發展と世界市場の平和的侵略とに全力を傾注せんとす。

普佛戰爭　一八七〇年九月セダン陷落、佛帝ナポレオン三世降伏、獨軍巴里を包圍す、翌年一月巴里陷落、ウイルヘルム一世巴里ベルサイユの宮殿に於て獨逸皇帝の位に卽く式を擧ぐ。佛國、アルサス・ローレン二州を獨逸に割讓し償金五十億フランを出す。

普魯西は農業國なり、大地主たる貴族の跋扈する國なり。而して、大地主は農業あるを知つて、商工業の貴ぶべき所以を知らず。然るに、此の間に人となり、凡ての點に於て全然普魯西の一貴族たるカイゼルは決して重農の弊に陷らず、商工を以て國本となさゞるべからざる所以を了解したるなりき。

彼が「貴族と軍隊とは王位の基礎たる銅の岩なり。」といひしは、吾人の嘗て聞きたるところなり。されど、彼はこれが爲に、彼等の跋扈を許さず。或時、中歐の運河の開鑿に關して彼等と商工民との間に激烈なる論爭を生ぜしことあり。彼、乃ち商工民の主張を以て正當なりとし、若し普魯西の農民にして中歐大運河の開鑿に反對せば、つゆ容赦せざるべしといへり。

英人は、數百年に亙りて尨大なる植民地を支配し來れる結果、遂にグレート、ブリテンといふ思想に達し、國民は知らず識らず世界的となれり。然れども、獨逸人は、昨日までも、無數の小邦に分れて、蝸牛角上の爭を事とせしものなり。彼等をしてグレート、ジャーマニーといふ觀念を抱かしめんことは一朝一夕の事業にあらず。是に於てか、カイゼルはまづ國民に對して大獨逸といふ思想を鼓吹する必要を認めたり。

千八百九十六年一月十八日は、獨逸建國二十五年祭の行は

れし日なり。宮中に盛大なる宴會あり。宴酣にして、カイゼルは次の如き演說をなせり。

獨逸帝國は世界帝國となれり。世界到る處、獨逸人を見ざることなく、獨逸の物產、獨逸の科學は遠く海外に及び、獨逸の海上貿易は年々數十億金を算す。此の大獨逸をして永久歐羅巴獨逸に附屬せしめざるべからず。

千八百九十一年一月七日、遞信次官に與へし書に曰く、

世界は十九世紀の末葉に至りて貿易時代に入れり。貿易は國境を破壞し、國際間に新しき關係を生ぜしめたり。と。

獨逸の有する陸軍は歐羅巴獨逸の防備には十分なり。然れども、カイゼルの所謂世界的帝國の軍備には更に有力なる艦隊を要す。彼が海軍擴張を絕叫せしは實に此の時なり。彼は、內治問題に於て國民が彼の下に一致協同の動作をなさんことを要求せしが如く、外交問題に於ても、全獨逸人が一個の集團となつて、世界的大戰爭に參加せんことを希望せり。

千八百九十九年十月十八日、ハンブルグに軍艦カール大帝の進水式あり。彼乃ち曰く、

海軍の對外貿易發展の上に缺くべからざることは、いふまでもなし。これに關する獨逸人の思想は、頗(コノゴロ)者稍進步の跡を示すに至れるが、尙頗る幼稚なるを免れず。悲し

ハンブルグ　獨逸西北部エルベ河口に在る自由市。

いかな、獨逸人は黨爭のために精力の大部分を消耗し、世界的問題に對しては常に他國に機先を制せらる。世界は最近二三年間に於て全然その趨勢を變じたり。我等をしてまづ世界の大勢を觀察せしめよ。老帝國は衰頽し、新帝國は各處に勃興し、數年前まで世人の注意を惹かざりし東亞の一民族は一朝にして大邦の列に加はり、他の諸國に對して激しき競爭を開始するに至れり。是、人類の文明が最近に至りて著しき進歩を遂げ、國際關係及び貿易關係の變動が頗る敏活となり、古代に於て數十年を要せしことも數月にして成就せらるゝが爲なり。されば、獨逸帝國及び獨逸國民の任務は甚だしく重且大を

慢罵 自ラホコリテ他ヲノヽシルコト。

加へ、朕及び朕の政府の負擔は著しく增加せり。若し國民が依然として黨爭を事とし、一致して外に當るなくんば、國家の前途甚だ寒心に堪へざるなり。

國民はまづ黨爭を廢し、黨の利益の爲に國民一般の幸福を犧牲とし、政府の施政に對して放縱なる論議を事とするが如きことあるべからず。我が海軍はこれらの黨爭の爲に進歩を阻害せられたり。朕は、即位後八年の間、熱心に海軍の擴張を主張したれども、國民は慢罵と嘲笑とを以て之に應へたり。若し、當時、國民が朕の要求を容れて、直ちに海軍擴張に從事したらんには、獨逸の海上權及び貿易の發展は、恐らくは、今日の比にあらざるべし。遮

謳歌（オウカ）　衆人ノ其ノ德ヲ称ヘタタヘルコト。

先帝　フリードリヤ三世。

先々帝　ウィルヘルム一世。

莫、獨逸人の愛國心は未だ全然消耗せじ。彼等はやがて奮起すべし。先帝陛下の記念祭に於ける國民の熱狂は能く之を證せり。

先帝はビスマルク等の忠臣と共に先々帝を助け、獨逸帝國を建設して、我等に讓與し給ひき。我等は、これにより て、我等の祖先が夢想し、わが詩人が豫言謳歌せし獨逸帝國を面前に見るを得るに至れり。されば、今よりして、吾人の努むべきは、この大なる建設物の各部に對して徒に批評を加へ、或は不平を鳴らすに非ずして、十月の先帝祭に於ける談の如き熱情を以て、更に第二の目的に向つて突進し、國際間に於ける獨逸の地位を自覺し、列國の形勢に注意し、黨爭を廢して一致協同の實を擧ぐべし。かくて始めて、獨逸國民はハンザの事業を進行せしむるを得べし。これ朕の願なり。

ハンザの事業　西紀一二五〇年頃に北獨逸の大市數十が同盟を作りて各軍隊を置きて封建諸侯及び海賊等に對して各の通商貿易及び農業工業漁業を防護したるを指す。

カイゼルの平和政策は、必須條件として、軍隊的に鞏固なる獨逸を豫想せり。即ち、彼はこれによりて、隣邦をして兵革を動かさんとする機會なからしめ、時によりては、平和を強制せんとするなり。かくして、列強より畏敬せられ各國より信認せらるゝ獨逸は、即ち彼の理想的國家にして、彼は之を以て獨逸の世界的覇權なりと稱せり。

カイゼルのいふところの大獨逸は、畢竟此の如きものなり。獨逸は千八百七十年の戰役によりて今日の地位を作りき。

獨逸の世界盟主の覇權はこれに依りて一部分の成就を見き。今日以後の獨逸は海外に於て更に有力なる勢力を得ざるべからず。世界盟主の覇權は、此の如くにして、始めて完成の域に達すべし。されば、此の如きは畢竟陸軍力の能くすべき所に非ず。たゞ強大なる海軍あつて始めて其の目的は達せらるべし。カイゼルの使命は即ち此の點に在り。ウィルヘルム一世は陸軍に依りて歐洲に於ける獨逸の地位を作りき。カイゼルは即ち海軍に依りて世界に於ける獨逸の地位を作らざるべからずとせり。

千九百年七月三日、ウィルヘルムスハーフェンに、甲鐵艦ウィッテルスバッハの進水式あり。席上、バヴァリヤ皇族ル

ウィルヘルムスハーフェン　獨逸西北隅の港。

バヴァリヤ　獨逸南部にある一王國。

プレヒトの祝辭あり。カイゼル乃ちこれに答ふらく、

「大洋の浪は獨逸の門戸を叩き、獨逸國民の大國民として世界の政事的舞臺に上らんことを要求す。今や、世界は海上に於ても、異域に於ても獨逸及び獨逸皇帝を無視する能はざるに至れり。三十年前の獨逸は幾多の小邦に分れ蝸牛角上の爭に囚はれて、國際的問題の解決に參與することを忘れたりき。此の如きは朕の意にあらず。今後、國際的紛爭の生ずる場合あらば、獨逸は世界に於ける強國たる地位に鑑み、決して獨逸の勢力を無視せしむべからず。これが爲に、時に斷乎たる手段を執るは、朕の義務にして、又、朕の光榮ある特權なり。而して、朕は信ず、

乾坤一擲

賭ケテ事ヲ行フコトニイフ

自己ノ全力ヲ

島崎藤村
名は春樹。新體詩家。小說家。明治三年生。

此の如き場合には、獨逸の諸侯及び國民は一團となりて朕の背後に立つべきことを。

と。以て彼の旺盛なる覇氣と遠大なる抱負とを見るべし。

今やカイゼルは邦を提げて乾坤一擲の大戰に從へり。思ふに勝敗の決は自ら定まれるあり、屢くことなき望は終に達すべきにあらずと雖も、四面楚歌の間にありて勇戰健鬪、能く五年の歲月を支へたるもの決して偶然にあらざるなり。

（「獨逸皇帝」に據る）

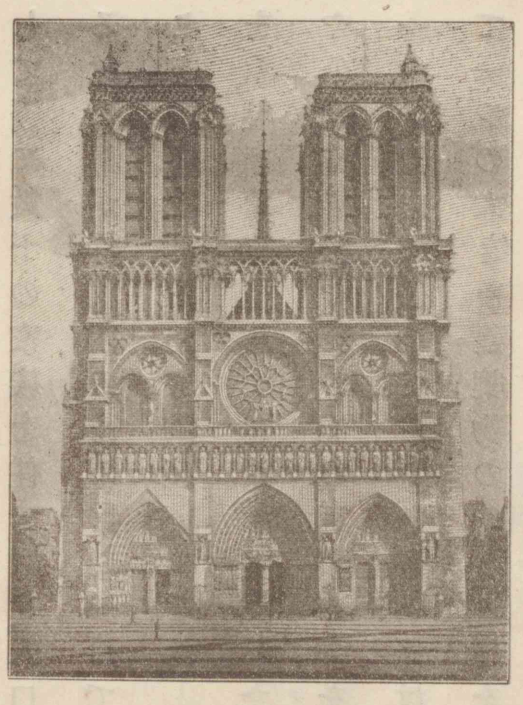
八　平和の巴里

島崎藤村

都市としての廣さから言へば、東京の半にも及ぶまいとは

當地へ參らない前から友人の話で聞いては居りましたが、そのかはり立體的に積み重ねた高敞な建物には一家屋にして優に數十の家族を住まはせ、人口に於て三百萬を數ふる此の都が佛蘭西の諺に言ふ一日で現出した巴里で無いことは申上げる迄も御座いません。けれども幾多の設計を承繼ぎ承繼ぎして建設し整理した街路や、建物や、町並木や、公園や、橋梁や、其の他の工事の跡を考へて見ますと、ある一つの意志に依つて成つたかと思はれるほど町全體として一つの大きな建築物のやうな趣を見せて居ります。かういふ點から申せば、巴里は確に一つの傑作だと存じます。いかなる旅人でも、あの凱旋門を中心に四方へ續く街路の

一つに立つて見るとか、又は一つ〳〵の異なる意匠から成立つて居るセエヌ河の橋の一つへでも參りまして、あの西岸に連なり續く町町の光景を望んで見るとか致しますならば、如何に大きな設計と意匠とが全體として統一を保つて居るかを認めない譯にはいかないだらうと存じます。



ノートルダム寺院

この古くさびた都に漂ふ空氣の中にはどういふものが流動し、凝滯すると御考へでせう。あの香の煙で燻り煤けたやうなノートル、ダムの古塔が聳え立つ町の空に、私はすぐ新式の飛行機が高く飛揚するのを思ひ出すことが出來ます。何といふ矛盾でせう。何といふ不調和でせう。私は無數の自動車などが通り過ぎる廣い滑らかな街路の側で、倒れるまで鞭うたれる荷馬車の馬を目擊したこともございます。私は又、私の捨てた卷煙草の吸殼を、しかも私が見て居る前で拾取つて行く極貧しい人などに幾度となく遭遇したこともございます。こゝには極古いものと極新しいものとが同棲して居ります。非常に開けた事と非常に野蠻な感じのする事とが同棲して居ります。舊教と科學

ノートルダム　巴里にある有名なる寺。十二世紀の建築尙存す。

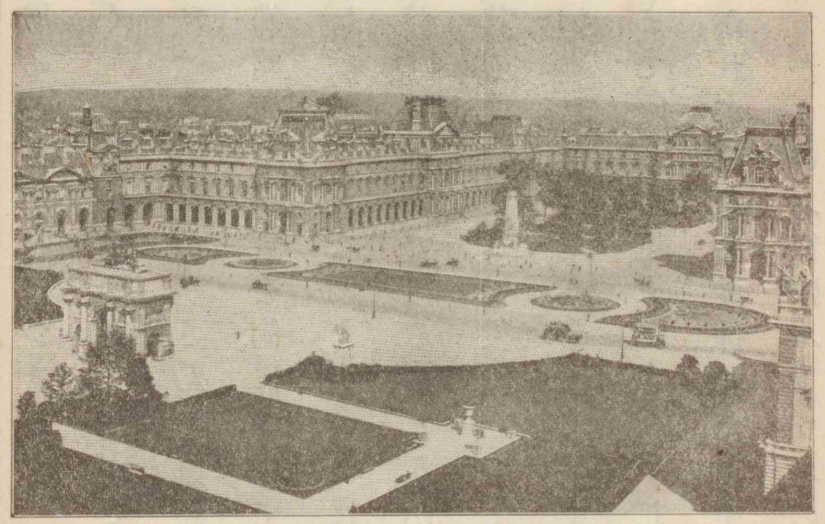
とが同棲して居ります。詩と散文とが同棲して居ります。かういふあり餘る程の矛盾を容れながら、全體として見れば、いかにも落着いた好い感じを與へる所が多くの旅人の心を惹くのでせうと思ひます。巴里に比べると、伯林はあらゆる意味に於て近代的であります。そして、そつくりそのまゝとは言兼ねますが、伯林といふ語を東京といふ語に置きかへることも出來るやうな氣が致します。

日常のことに就いて申しましても、先づ氣のつくのは貯へて行く生活の姿といふことでございます。

斯の宿の老婦などの日常にすら、いかにも物を大切にし、珍重し、愛玩し、またそれを何等かの方法で活用しようとして

居ることが眼につきます。こゝの食堂の壁には左程珍しくもない佛蘭西製の皿がさも大切らしく懸つて居ります。私は宿のおかみさんの眞黑な服を着た胸のあたりに、古い佛蘭西の銀貨を飾につけて居るのを時々見かけます。これは極手近な例を引いたに過ぎません。古い銀貨の胸飾が好い趣味であるかどうかなどと問はずに置いて下さい。其の樣な物まで役に立つて居るところを考へて見て下さい。私は當地へ參つて見て、極微細なと思はれるやうな物まで、廢らず粗末にされず、しかもそれがごく普通な家に置かれて特色を發揮したり生命を保つたりして行くのを見て、かういふ都にルーヴルのやうな美術館が出來たのは偶

ルーヴル
巴里にある佛國の舊王宮。今有名なる美術を陳列す。



ルーヴル美術館

然でないことを知りました。日本を初め、支那・印度・波斯・埃及其の他の國から古い貴重な美術品が流れ込んで來て巴里の大商館を飾つて居るのも決して不思議でないことを知りました。

家屋の多くが石造であることも自然と是に適して居ります。家屋の一つ〳〵は皆貯藏庫の趣があります。町

北村透谷
新體詩家。明治二十五年歿す、年二十七。

全體が藏だと言つても差支ないかも知れません。新奇を競ひ目先を變へることの爲には、以前の白木屋のやうな立派な江戸風な家屋さへ、どし〳〵つぶされて行く東京のことに思ひ比べると、こゝの町々には實に古い建物までが大切に保存されて、中には三百年も以前の歴史を語つて居るのがございます。それほど價値と形式とが重んぜられて居ります。すべての物がよく貯へられて居ります。骨董的でなしに鑑賞されて居ります。この町を歩いて居りますと、例へば我が國で申すならば「詩人北村透谷この家に死す。」といふやうなことが年號まで書添へられて、その家を飾つて居るのをよく見掛けます。

何といふ風土の相違でせう。夏は廂なしには住まはれないほどの日光を受け、家屋にも樹木にも衣服や皮膚にまで附着するほどの風塵を浴び、毎年きまつてやつて來る多量な雨と濕氣と出水の心配と、其の他多くの昆蟲のために苦しめられ、冬は一夜にして町々を灰燼に化し去る程の烈しい北風と戰つて、さういふ中で日常の生活を營んで居ることを思ひますと、住居を成るべくあけひろげ、大事な物は取片附け、黴びた物は乾し、汚れ易い身體は洗ふやうにして、瀟洒と清潔とを愛するやうに成つたのは極自然なことだらうと存じます。宵越の金は使はないなどと申して、貯へることを寧ろ卑しとした江戸子の贅澤もさうした風土が產

んだものではございますまいか。わが東京をこの巴里に比べて見ますと、私はその間の相違のあまりに懸け離れて居ろのに驚かずには居られません。こゝには東京で見るやうな日光の強さも輝きも有りません。年百年中、同じ着物で押通して居る人もございます。雨量は少く、空氣は乾燥して物の黴びるといふことも無く、蟲がつくといふことも有りません。梅雨の後の蟲干なども當地には有りません。ひどい風も吹かず、塵も立たず、ですから、勞動でもしない限は精々月に一度の入浴でも濟ませる譯でございます。私はこの町全體を藏のやうだと言ひましたが、もう少し詳しく言つて大きな乾燥室だと形容して見たいと思ひます。

かうした乾燥室の内では、戸棚や押入を澤山に造つて物をしまつて置く必要が無い筈です。ありとあらゆる物が出して置ける筈です。色彩と生命とが長く保たれる筈です。巴里の都が自然の幸を受けることの多い位置にあることは是迄の話で略想像されようかと存じます。それだけを御話すれば私は今いかにも樂しい月日を送つて居るもののやうに聞えます。しかし私の身は旅でございます。どうして、そんなに住み憂くない場所があらう筈はございません。

東京のやうな變化の多い處に住慣れた私に取つては、何時の間に夏が過去り、何時の間に秋が來たのか、其の差別のつ

きかねるやうな當地の氣候が何となく物足りなく思はれることがございます。美しいとは思ひますが、時とするとくひ足りないやうな氣も致します。ざあと夕立でも來てくれゝば好いなあと思ひ〳〵して居るうちに秋が來て、蜻蛉一つ町の空に飛んで來るのを見ないうちに、はや秋は暮れて行きました。大風が吹いて一晩の中に並木が倒れたなどといふ例も無ければ、蟲のために損はれる憂も少いこの土地にあつては、町々の樹木の完全な發育が見られ、幹から梢までその全景を樂しむことが出來ます。そのかはり綠の色が何となく力弱く灰色がかつて見えます。多少は油蟲などが附着して居ても、もつと精分の強い、もつと繁殖

力の熾んな故郷の樹木が見たいと思ふ事がございます。雨量は少く地震の心配も無いかはりに、青空などもどんよりと致して居りまして、明るいからつとした東京の方の晴れた空が見たいと思ふことがございます。月の光もこゝでは淡うございます。黄ばんだ月が、黄昏時になると窓の外にぼんやりと懸つて居るのをよく見かけます。

自分等の性質の中に單調に耐へられないやうな所の有るのは、新陳代謝の激しく行はれる母國の風土から自然と激成されたものかとも思ひます。極靜かに移り變つて行くやうな當地では月日のたつといふことを東京ほどに感じません。東京の三月は巴里の三年にむかふやうな氣が致

雉り雉トん人。
兎リ兎トん。
菊ハ草カり。
蕎ハきコり。

廻船。
廻漕ノ用ニ船。

松尾芭蕉
伊賀に生れ、江戸に住す。俳人。元祿七年(一六九四)没す年五十一。

十二日
元祿二年五月。
黄金花咲く
すべろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山に黄金花咲く。
萬葉集。

します。（平和の巴里）

九　奥の細道

松尾芭蕉

十二日、平泉と志し、あねはの松・緒絶の橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎・芻蕘の行きかふ道、そこともわかず、終に道踏違へて石卷といふ港に出づ。「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ちつゞきたり。「思ひがけずかゝる處にも來れるかな」と宿からんとすれど更に宿かす人もなし。やうやう貧しき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。袖の渡・尾駮の牧・眞野の萱原などよそめに見て、遙

三代の榮耀

陸奥ノ出羽ノ押領使藤原清衡
基衡、秀衡ノ三人相ツギテ世ニ
時メキサカヘタルヲイフ。榮耀ハ榮務
ナ生活ヲスルコト。
ヲ榮華。

一炊ノ夢
一睡ノ間ノ夢。人生ハカナキコトヲ
邯鄲ノ夢ニ例ヘタルモノ。
邯鄲ト云フ人ヲ。

黄粱一炊ノ夢モ同
モ云フ。粱飯カモリホドリツ

三代

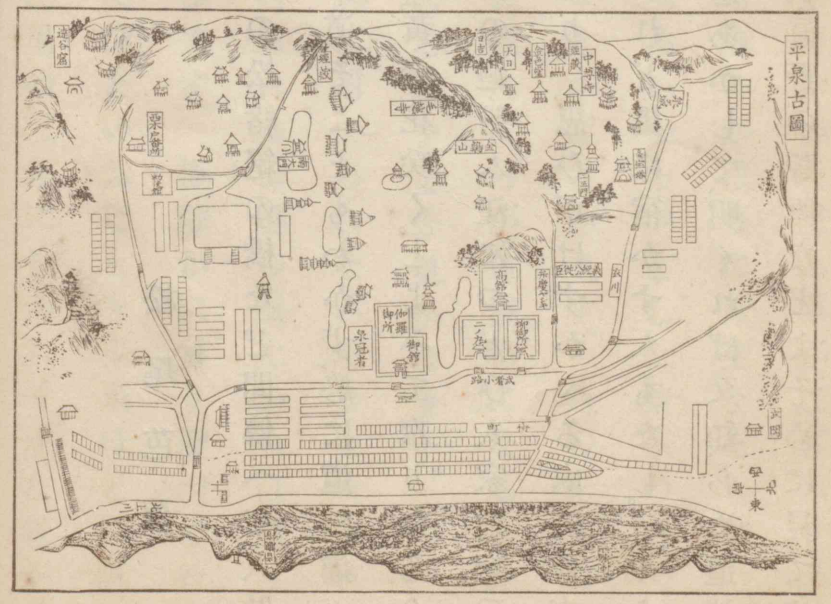
藤原清衡・基衡・秀衡。

金鶏山

秀衡の築きて平泉の鎮護となせる山。

かなる堤を行く。心細き長沼にそうて戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が墟は田野になりて金鶏山のみ形を遺す。まづ高館にのぼれば、北上川南



平泉古圖（奥州高館沿革志）

國破れて

國破山河在。
城春草木深。
杜甫。

部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下に落ち入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てゝ南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時のくさむらとなる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて時の移るまで涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

藤原清衡・基衡・秀衡畫像

兼房　義經の郎黨增尾七郎。年六十餘、白髮を被り奮鬪して死す。

金色堂及び三尊佛像

卯の花に兼房見ゆる白髮かな。　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉、風に破れ、黃金の柱、霜雪に朽ちて既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新にかこひ、甍を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歲の記念となれり。

さみだれの降りのこしてや光堂。（奥の細道）

一〇　花の雲

花の雲鐘も上野か浅草か　松尾芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川

移移に鳥のなきうをの秋の暮

義海や佐渡によこふる天の川

夏の月や故を荒して立る両　榎本其角

黃菊白菊その外の名なき草　服部嵐雪

江戸八百八町虛トシテ花ノ雲デナイ所ハナイ空ニ鐘ノ音ガドンヨリトブクニアレハ上野カ浅草カ其トモ淡草ノ薄霞ヤラヲ出スノカ其トモ淡草ノ薄霞ヤラヲ出スノ来ルノデアラウカ、

榎本其角　近江の人、江戸に住む。寶永四年（一七〇七）歿す年四十七。

服部嵐雪　淡路の人、江戸に住む。寶永四年（一七〇七）歿す年五十四。

向井去來　肥前の人、京都に住む。實永元年（一六四八）歿す年五十四

與謝蕪村　摂津天王寺の人、京都に住む。天明三年（一七八三）歿す年六十七。

加藤曉臺　名古屋の人、京都に住む。寛政四年（一七九二）歿す六十餘。

大島蓼太　信濃の人、江戸に住む。天明七年（一七八七）歿す年七十。

舊師　山陽の武術の師、築山奉盈。

賴山陽　賴久太郎襄。詩人、文章家。安藝國竹原の人。京都に住す。天保三年（一八三二）歿す年五十三。本文は山陽三十一歳備後菅茶山の塾にまりし時の消息。

卯の花の絶間さん時鳥の門　向井去來

書の海路のつれ〳〵う那　與謝蕪村

富士一つ埋み残して若葉哉　加藤曉臺

易水にねぶく流るゝ夏草哉

桃すもゝ花つゝ実も長し　大島蓼太

五月雨や或夜ひそかに松の白　賴山陽

一一　舊師に懷を述ぶ

幸便に任せ一筆奉申上候。殘暑之節益御勇健被遊御座候哉、奉伺候。其以來は打絶不奉伺、背本意罷在候。誠に去臘は色々と御世話被遊被下、御別之刻も御親切之條々心肝に銘し、今に目前に在るが如く、忘れ難く奉存候。其後も度々御噂ども被成下候趣愚父方より申越候。斯樣之者をも御見捨不被下候段、身に餘り難有奉存候。

扨此度内々心事申上度儀御座候而奉得貴意候。誠に父儀土民より御取立を蒙り、御國恩海山に御座候へば、其子たる者粉骨齏身仕候ても、御奉公可申筈に御座候處、只今之身分に相成致方無之、又假令再御使被遊被下候儀、萬一出來仕候而も生來多病弱質之私少し之事に

舊師　以前の先生。ここは山陽の武術の師、築山奉盈（通稱主馬）を指す。

愚父　賴彌太郎惟寛　春水と號す。廣島藩の儒者。文化十三年（一八一六）歿す年七十一。

只今之身分　山陽三十歳頃濟の上藩を出て備後菅茶山の塾にて教授を助く。

も耐兼候故、自身に甚だ無覺束奉存候。又御奉公不仕とも御報恩之致方無之とは不可申、自身に是程之事はたしかに出來可申と存候事にて尺寸の報を心懸居申候事に御座候。經書講釋等も不得手の儀、得手と申而は史學文章に御座候。是にて少々にても御國の御用に相立候儀仕度、即ち籠居以來、日本外史と申す武家の記錄二十二卷著述成就仕居候へども、是は區々たる事にて引用の書ども不自由、私心に滿不申。愚父壯年之頃より本朝編年の史輯め申度志に御座候處、官事繁多にて十枚許致置候まゝにて相止申候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を繼ぎ、此業を成就仕、日本にて必用の大典は藝州の書物と人に爲呼申度念願に御座候。此儀三都に居申候而、書物を廣く取集め多聞の友を多く取り不申而は出來不仕事に御座候。水戸日本史抔も江戸に史館御建被遊候は此譯に御座候。右史館抔申すは大造の儀に御座候故、一分にて私朋友・門人抔相聚、仕上候儀は手覺御座候。少しも御上の御物入等懸け候儀は無之候。其上凡そ古より學者の業を成し候地は三都の外は無之候。如何なる達人にても田舍藝は用に立不申、闇齋・仁齋・徂徠などの樣の業は、都會ならでは出來不申。如此人々にても左樣に候へば、まして凡人は猶更の事にて、不肖の私に御座候へども、何卒右

の場所へ出、名儒俊才に附合も候はゞ、學業成就、名を天下に揚げ、末代迄も藝州に何某と被呼候はゞ、螢火にて月光を增候譬にて、少しは御國の光とも成可申哉、生前之念願不過之奉存候。

然る處福山の公邊に而は、私を取放し不申樣と役人ども も寄合、彼是と談合仕、私に知行爲取、士儒に取立申度旨、內意菅先生より被申聞候。先生には私所存をば承知無之、不仕合の私故、是は宜しき事に有附候事故、承引可仕旨勸められ候。私對候に、是は案外の事を承り候。私奉公出來候身に候はゞ、本國にて仕可申筈之儀に御座候。本國にても奉公不仕候上は、如何樣の御勸にて

菅先生
太中、茶山と號す。備後の漢學者。文政十年(一八二七)歿す年八十。

太中
茶山ノ通稱

叔父
賴萬四郎惟柔、杏坪と號す。廣島藩の儒者郡奉行。天保五年(一八三四)歿す年七十九。

も決して此儀可仕樣無御座旨答申候へば、それは小國故嫌候か、小國にても俸祿は隨分宜しき旨被申候故、私は義の一字を申候。義に協ひ不申儀に候はゞ、假令加賀・薩摩より所望に預り候而も、見向も不仕了簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞をも盡し不申、他國にておめおめと出仕候事、何の面目にて天下の人に對し可申哉と申切候。

何分年少氣壯の內に一度大處へ出で、當世の才俊と被呼候者共と勝負を決し申度奉存候。家父叔父共は御承知の氣遣手に御座候故、兎角手放候事致兼、爰元へ差越候とも兄弟同樣の太中に預置候へば氣遣無之、其內

に年も寄候へば、分別直り可申と心組可申候へども、私は若氣のみにては無之、前段の大志御座候故に御座候。此念願と申も、人に少しも世話を懸け物入をさせ候事には無之、唯一言の許を受け候へば、私一分の才覺を以て、口を餬し候事は如何とも仕、家許より仕送等は一錢も煩し不申積に御座候。家父老年に相成候て、他處へ罷越候儀如何御座候へども、此處へ參居候も、京大阪に居候も五十歩百歩の違に候。此處に彼是と月日を積候内、菅先生薫育の恩義は日々に重り候而難去相成可申、さりとても多年の念願、無に仕候も殘念至極、申計も無之、如何可仕哉と案じ煩ひ、當所へ參り候而より、下地

御憐愍オアハレミ

病氣增長仕、食事等も大に減少候樣に御座候而、ぶらぶら仕居申候。何卒尊公樣の御憐愍にて人一人御救被下、本意を爲遂被下候事は相成申間敷哉。左樣にも相成候はゞ、英氣は百倍仕、多病の身も學問出精、天下之人に一人も追付せ不申了簡に御座候。身分落着、事業成就仕候上は家父も安心仕、少々は御國の御用に相立候事、出來仕可申候。何卒兩親存生中に此場を見せ申度奉存候。

斯樣の存念、廣島に居申候節より申上度奉存候へども、憚多く、時節も到來不仕と存、默止仕居候。骨肉の間は何日迄も小兒の樣に存じ、思切取計は出來不申、病人の

療治は他人決斷仕候如く、此事は他人の所決に御座候。尊公様ならでは此儀御決斷被下候人は無之候故、半年の餘もとつおいつ案じつめ候て此度不顧憚、生涯の浮沈と覺悟相究、申上候。乍恐能々御勘辨被下候而、尊公様の御心附として被仰出可被下、私生涯の大望御遂させ被遊候はゞ、此御恩生々世々忘却仕まじく候。失言の罪眞平御高免可被下候。とても筆には盡不申、申留候。頓首敬白。（山陽外傳）

世々、ヨリアノ世、黄泉、

朝比奈知泉 評論家。文久三年（一八六三）生。

一二 賴山陽その一

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。

詞藝 文藝ニ同ジ 文學、藝術、

彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脫して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は奬勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬彬として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つら〳〵各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは

限極　一局部ニ限ラル。

チョーサー　十四世紀の英國の詩人。(1340頃-1400)
スペンサー　十六世紀の英國の詩人。(1552頃-1599)
シェクスピヤ　十六七世紀の英國の詩人、戯曲作家。(1564-1616)
ミルトン　十七世紀の英國の詩人。(1608-1674)
コルネイユ　十七世紀の佛國の戯曲作家。(1606-1684)
モリエール　十七世紀の佛國の戯曲作家、俳優。(1622-1673)
ラシーヌ　十七世紀の佛國の詩人。(1639-1699)
レッシング　十八世紀の獨逸の戯曲作家、批評家。(1729-1781)

大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・シェクスピヤ・ミルトンの英文學に於ける、コルネイユ・モリエール・ラシ！ヌの佛文學に於ける、レッシング・ゲーテ・シルレルの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず、是を以てその勢力の及ぶところ限極せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの

恰當　丁度アテハマリタルコト。最モ適當ナルコト。

ゲーテ　十八九世紀の獨逸の詩人、戯曲作家、評論家。(1749-1832)
シルレル　十八九世紀の詩人、戯曲作家、歴史家。(1753-1805)
ダンテ　十四世紀の伊太利の詩人。(1265-1321)
ペトラルカ　十四世紀の伊太利の詩人。(1304-1374)
眞淵　賀茂眞淵。國學者、歌人。明和六年(一七六九)歿す年七十三。
景樹　香川景樹。歌人。天保十四年(一八四三)歿す年七十四。
近松　門左衛門。戯曲作家。享保九年(一七二四)歿す年七十二。

諸家の外に於てその才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世・絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人とその才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜む所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽頼氏是なり。

竹田雲濤。戲曲作家。寶暦六年（一七五六）歿す年六十六。

老博士　柴野栗山。漢學者。文化五年（一八〇八）歿す年七十四。

「詩は別才なり」といひ、「詩人は生る、成るにあらず」といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。その童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、その忠臣・義士を懷ふに厚く、天下・國家を懷ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さゞるところなく、春花秋月、遊展遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格・言行、誰かこれを詩にあらずといはん。

頼山陽

行李卸サザル行ナク、諸處ヲ旅行中ノ手荷物即チ柳行李ノ類ヲ卸シテ滯留セシコト。

遊展　逆ルセル展物

畛域　畛ハ田ノ間ノ陌、即チ畔ニ同ジ。小路ヲ以テ畛域ノ界トナリ、師タルモノノ威望ヲ持タズ

嫋々ノ餘韻　細ク長ク絶エントシテ絶エザル声

試にその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は誤謬のみ、その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敍事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈脈の餘情を含み、或は嫋々の餘韻を存す。爭戰を敍すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敍すれば讀者をして涙に

感慨淋漓　感情ノアフレテ適リ落チンバカリニナリテ感慨ト、時事ニ感ジテナゲキ悲シムコト。

一唱三歎　天ハ一人ヨリ出ジ三人唱フルナリ。

博引旁搜　多ク諸事ヲ引キアツメテ事実ヲサグルコト。

咽ばしむ。而してその敍論の如き、俯仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の爭戰記を採りたるが如き、その事實に於ては博引旁搜と明證確說とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、專らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敍事詩たるのみ。

市糴　賣買ノ意ニテ商業ヲ云フ。

遒麗　ツヨクシテウルハシキコト。

試にその論策・文章を視よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、空疎迂濶にして、實用に施すべからざるもの比々として皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙は、おほくは小品の文字にあり。その形體は卽ち論策たり、文章たり、その本質は卽ち想像のみ、詩詞のみ。

去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、遒麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳に採りてこれを

詩詞に寓したるものにあり。山陽亦自ら以て得意とし、「余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成眞詩。舍之而曰雁字鶯梭、無爲也」とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戲に作れる今樣を讀み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、「この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり、もし馳驟縱橫、奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地・嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず、潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒してこれを詩賦に注がんか、儼然たる敍事詩を作りてわが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて專ら功力を詩に用ひざりしこと。

今樣　花よりあくるみ吉野の春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も大和心になりぬべし。

李北地　名は夢陽。明の詩人。

嚴海珊　清初の詩人。

一三　賴山陽 その二

朝比奈知泉

余が山陽の專ら詩人とならざりしを惜む理由頗る多し。今且くこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべか

熱肺腸　熱烈な精神

らず。而して尊王の誠と忠臣・義士を思ふ情とは、面に見れて背に盎る。これ三なり。

而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常日

江木鰐水　名は戇。安藝の人。山陽の門人。明治十四年歿す、年七十二。

眺蒼船底響空濤天茫洋中未轉櫓
太白一星光如月波百點兄毛魚跳

泊天草洋　頼山陽未定稿（山陽先生眞蹟西遊詩）

「謂我才子、未悉我者也、謂我能刻苦者、眞知我矣」といふに至り、竊にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後かの前兵兒謠並に蒙古來の原稿を觀るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審にし、且その古賀穀堂を訪ひ、初、その千言立成の敏才に驚きしが、數月を隔てゝ再び訪ひたるとき、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、茲に與し易きのみの念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘憺、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景

古賀穀堂　名は熙。佐賀藩の儒者。天保七年歿す年五十九、

雲耶山耶吳耶越水天髣髴青一髮萬
里泊舟天草洋憑欄遠望衡海暫見
大魚波百尺跳太白當船照秋月

泊天草洋　頼山陽定稿（維新志士遺芳帖）

慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜む第四の理由とするは、卽ち斯の經營刻苦の氣力のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り章句訓詁の末を爭ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つら〳〵山陽の才幹を窺ふに、政治吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。則ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はゞ、その成功何ぞ啻に今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、「山陽は外史を著して一世を

絢爛　文采ノキラビヤカカガヤカサマ。

章句訓詁　糸ヲ爭フ　文章ノ精神ヲ忘レテ、ヒタスラ語句ノ細事ヲ注釋スルコト。訓ハ字義ノ文字ノ意義。詁ハ句ノ高義ナリ。

鼓舞し、大いに尊王の士氣を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん」と。嗚呼、これ詩を知らざるもの の言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙に散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きはその文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小說と實錄との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては決して完全なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ始めより純然たる詩篇を爲るの愈れるに若かんや。

柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、「實材たらしむべし、詞人たらしむべからず」とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脫せずといへども、その史を學ばしめたるは大いに可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。（今世名家文鈔）

徳富蘇峰 名は猪一郎。評論家。新聞記者。文久三年（一八六三）生。

司馬仲達 三國時代の魏の將司馬懿。

祁山 支那甘肅省秦州府にあり。諸葛孔明が北征せるときの陣所。

渭水 支那甘肅省より出で陝西省西安府（古の長安）を經て黃河に注ぐ。

空營ヲ拔ジテ軍隊ヲ引キアゲ、アトノ空ニキ陣營ヲ空ニ

一四　知己難

徳富蘇峯

朋友にして知己ならざる者あり、知己にして朋友ならざる者あり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの司馬仲達が祁山・渭水の空營を按じて、「天下の奇才なり」と叫びたるを見れば、仲達は孔明の知己たりしなり。孔明は實に二個の知己をもてり。敵にては仲達、味方にては玄德。人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は、即ち朋友の出來る時なり。觸るれば情を生じ、着すれば情を生じ、久しければ、情を生じ、數〻すれば、情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同鄕の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友もまた類多し。然り天下、何人か友ならざるものあらん。少し心を入れて談話すれば、東京より橫濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人を得らるゝにあらずや。知己に至りては、然らず。天下千百の朋友を得るは容易なり、而して一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞや。我

孔明 蜀の丞相諸葛亮。

玄德 蜀の昭烈帝劉備。

同臭味友 同類、同志ノ義

よりすれば、彼に知らるゝなり。彼よりすれば我に知らるゝなり。

君ならで誰にか見せん梅の花
色をも香をも知る人ぞ知る。

是實に知己に對する情なり。知己、實に難し。故に知己を得れば、殆ど生命を得たるよりも嬉しく、知己を失へば、生命を失ひたるよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荆軻死して高漸離また筑を擊たず。その心まことに哀むべきものあり。

楊巨源の詩にいはく、

詩家清景在新春、柳嫩鵞黄色未勻。

君ならで
紀友則。古今集。

鍾子期
鍾子期死、伯牙破レ琴絶レ絃終身不二復鼓一レ琴。以爲無二足二爲鼓一者一。呂氏春秋。

荆軻
高漸離擊レ筑、荆軻和而歌、相樂也。史記。

楊巨源
唐の詩人。

若待上林花似錦、出門皆是看花人。

と。龍を見て龍となすは難きにあらず。唯一寸の蛇を見て、早くもその雲を起し、霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、是難きなり。知己の難きは、其の未だ發達せざる時に於て、他日の發達をトすることの難きにあり。その見れたる嘻笑怒罵の外に、隱れたる胸間の神祕を會得することの難きにあり。

人はその半身以上は祕密なり。知己は能く鍵なくして、この祕密を知る。固より、他の我に向ひて語るを待たざるなり。語るを待ちて之を知るが如き、是豈知己ならんや。劉禹錫の白樂天に贈る詩に曰く、

茫洋
龍乘二是氣一茫洋窮二乎玄間一薄二日月一。韓退之の雜說。

東坡　宋の蘇軾。字は子瞻。詩文に長ず。

子由　宋の蘇轍。潁濱と號す。文を善くす。

尋常相見意殷勤、別後相思夢更頻。
毎遇登臨好風景、羨他天性少情人。

と。夫、一の好風景を觀てすら、尚其の知己を憶ふ。況や人の死生の間に處するをや。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟、子由に贈りていはく、

是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神。
與君世々爲兄弟、又結來生未了因。

と。その同胞の情もとより篤し。況や之に重ぬるに、雙々知己の恩愛を以てするに於てをや。死後尚兄弟となり、その未了の因を繫がんといふ。世の兄弟にして、かくの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくかある。

賈誼　前漢の政論家。

屈原　支那戰國時代の楚の人。名は平。詩人。

孟軻　孟子。

キケロ　羅馬の雄辯家、哲學者、政治家。（前106―43）

知己は敵人にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感は、時を問はず、處を論ぜず。賈誼は屈原を慕ひ、孟軻は孔子を慕ふ。而して、孔子は周公を慕ひて、「われまた夢に周公を見ず」といひしが如き、その言の殷勤深切、感ずべきにあらずや。キケロいはく、「余に對しては、スキピオなほ生けるなり。而して、以て常に生くべし」と。嗚呼、宇宙茫々唯知己ありて、以て繫ぐ所あり。知己なくば、人生は荒野のみ、荆棘のみ。

人は知己のためにその憂苦患難を俱にするを厭はず。甚だしきは、その一身を投じて、知己のために犧牲となるものあり。彼らは漫に犧牲となるにあらず、實に知己のために

犧牲となるなり。苟も一の知己を得れば、生命を捨つとも悔いず。況や區々たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」といふ句は、實に人の深奥なる胸懷を吐露したるものなり。

人生の清福は知己を有せるにあり。朋友中に知己を有せるは清福なり。而して、その兄弟・姉妹・父母の中に知己を有せるは、最も大いなる清福なり。風雨の夜、兄弟床を並べて、千古の懷を敍する、天下復之に優る清福あらんや。（靜思餘錄）

魏徵　唐の太宗の臣。
ペスタロッチ　瑞西の教育家。（1746–1827）
澤柳政太郎　教育家。文學博士。貴族院議員。慶應元年（一八六五）生。
ルソー　佛國の文學者、思想家。（1712–1778）
ナポレオン　佛國皇帝。（1769–1821）

一五　ペスタロッチ

澤柳政太郎

今を距ること百餘年の昔、佛にはルソーの如きナポレオンの如きあり、獨にはフィヒテの如き、ゲーテの如きあり、政治界・思想界及び文學界に立ちて燦然たる光輝を放てる時に當りて、山紫水明、風光秀麗なる瑞西も亦教育界に一大人物を出して世界に大恩惠を施したりき。そを誰とかする。ヨハン、ハインリッヒ、ペスタロッチ卽ち其の人なり。

渠は悍鷙に似て亦家鳩の如く、猛獅に似て亦山羊の如く、大人に似てまた小兒の如く、勇は以て鬼神を欺くべく、愛は以て嬰兒を懷くべく、柔中に剛あり、剛中に柔あり、多面多角、不可思議の賦性を有し、政治問題にまれ、社會問題にまれ、はた教育問題にまれ、苟も人類の位置を高むる事に關して必要なるものならんには、凡て之を攻究精思して餘力を遺さず、

悍鷙（カンシ）　猛獅（タケキ）　羊（ヤウ）　鳩（ハト）

フィヒテ　獨逸の哲學者。（1746–1832）

芒刺（ボウシ）　ギ、稻麥ナドノ果穎ノ尖端ニアル剛キ毛

遂に教育史上一頭地を抽んでて、百年後の今日尚赫々たる名聲を擅にせり。

ペスタロッチの學生にして後に歴史家となれるフリーミンは、親戚及び故舊のために著したる其の幼時の回顧錄に記して曰く、

渠（カレ）の頭には、粗豪にして逆立ちたる毛髮を戴き、面には數多の痘痕を印し、且黄なる斑點は其の全部を蔽ひ、汚れたる鬚髯（シュビン）は長く尖りて芒刺の如く、極めて醜き人にてありき。又渠の頸には絶えて襟飾を纏ひしことなく、足に着けたるは不恰好なる袴、弊れたる靴下及び巨大なる靴のみなりき。しかのみならず、其の歩みざまは正整ならず、

其の眼は大にして輝くこともあり、或は窪み落ちて半ば閉ぢたることもあり、其の顔色は或は深き悲を包みたるが如く、或は平和の波を湛へたるが如し。其の語る時は忽ちにして緩く且音樂的に、忽ちにして急に且迅雷の如くなりき。これ予らが嘗て「父」と呼做したる其の人の面影なり。

渠の容貌・風采はかくの如し。然らば其の才藻・學藝はいかに。渠、嘗てブルグドルフの公立學校に奉職せんことを望みしことあり。チャールス、モンナードは此の時に於ける渠を評して曰く、

此の時に於ては、ブルグドルフの有司は一小學校と雖も、

之をペスタロッチに委任することを敢へてせざりしなるべし。此の人や、後にこそ世界を動かすほどの大名を揚げたれ、此の時に於ては極めて庸劣なる教員候補者にだに頡頏することを得ざりしならん。渠は萬事に短所多かりき。其の言語は濁りて不明なり、其の文字は拙劣なり、圖畫を能くせず、文法を知らず、諸學科一も長ずる所あらず。博物學の諸學科を

貧民學校に於けるペスタロツチ（サロー筆）

頡頏（ケツカウ）又キツカウ。互ニ劣リアヒテ相トラザルコト、テキタウコト。

ば學びたれども、其の分類法又は名稱などには毫も注意する所なかりき。又通常の計算には熟達したりしかど乘算又は除算の稍錯綜せる者に至りては大いに苦しみしなるべく、又幾何問題の如きは、恐らくは曾て解釋を試みしことだにあらざるべし。

然れども、其の膝下に養はれたる幾多の貧兒をして、呼んで父といはしめたる者は豈渠にあらずや。其の事業を共にせし多數の補助者をして、如何なる事に遭ふとも、曾て渠に離るゝに忍びざらしめたるものも亦渠にあらずや。乃ち知る渠は決して平々凡々を以て目すべき人物にあらざることを。況や其の才幹・力量の少且短なるにも拘らず、ノイ

ホフ・スタンツ・ブルグドルフ・イフェルダン等、到る處に千艱を凌ぎ、萬難を排し、屢偉大なる效果を奏して、人の耳目を驚かしたるが如きことあるに於てをや。況や又不朽の眞理を發見して、教育史上優に一頭地を抽んで、遙かに後世を麾くが如き概あるに於てをや。是に至りて誰か復、渠を目して哲人にあらず、偉人にあらずと斷言するを敢へてし得る者あらん。

因りて疑ふ、渠をして此の高尚なる地位に進ましめたる所以のもの、果して何くにか在ると。顧ふに、諸君は固より之に答ふる所以を知るなるべし。余請ふ、一言以てこれを蔽はん。曰く、「堅硬なること石の如く玲瓏たること玉の如き心操、即ち儒家の謂はゆる仁、聖徒の謂はゆる愛、佛氏の謂はゆる慈悲心、即ち是のみ」と。蓋し抑揚あり、頓挫あり、又波瀾ある渠が畢生の事業は其の根源を此の心操即ち貧民に對する憐愍の一念に發すればなり。渠をして墮落せる小兒と接觸することを厭はざらしめたるものも此の一念なり。渠をして疾病ある小兒と同衾することを辭せざらしめたるものもまた此の一念なり。或は神學家たらしめ、教育家たらしめ、辛酸嘗めざるなく、困苦極めざるなく、以て光澤あり、色彩ある、其の全生涯の歴史を織成さしめたるもの、凡て此の一念の然らしむる所ならずんばあらず。若し夫渠よりして此の一念を奪ひ去らんか、即ち是、渠なきなり。要す

るに、貧民の不幸を憐む一念こそ、渠が生命なれ、骨髄なれ。其の熱心の如き、其の忍耐の如き、其の愛情の如き、はた其の忘我の如き、苟も美を極め、善を盡し、以て人を聳動せしむる所以の諸德は、皆此の根本的一念の時に隨ひ、處に應じて名を變へ、形を異にしたるものに過ぎず。

予は唯薄弱なる一老翁のみ。予が知識には無量の闕點あり、且予が知力は比較的に小なり。唯、萬事に於て、予が意志の予が利己心のために支配せられざるは、恐らくは、予が唯一の特質ならん。

と。渠が忘我の德に富みしは、其の生涯の歷史明かにこれを證せり。蓋し渠が一代は殆ど忘我の痕跡なり。其の熱

心の如き、其の忍耐の如き、例を擧げ、證を求めなば將に其の煩に堪へざらんとす。然れども、此等の事實は苟も其の傳を繙かん者の皆能く知る所、吾人復何をか贅せん。抑天下の廣き、人物の多き、目して偉となし大となすべき者何ぞ限あらん。然れども渠の如く熱心に、渠の如く堅忍に、渠の如く慈愛深く、はた渠の如く忘我の德を備ふる者、天下廣しと雖も、人物多しと雖も、果して幾人かある。渠は容貌・風采の點に於て已に衆に劣れり、才藻學藝の點に於ても亦人に下れり。唯その人格の偉大なるに至りては、類を絶ち、群を超えて、夐かに一頭地を抽んづるものなり。嗚呼是ペスタロッチのペスタロッチたる所以なるか。（ペスタロッチ）

一六 平安時代の文學

その一 和歌

平安時代は支那の文化の次第に我が文化と融合したる時代にして我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。謂はゆる和魂漢才の語は實にこの時代の造語なり。就中文學上に最大の關係を有するは假名文字の製作なり。奈良朝に於ては、漢字の音訓を假りて國音を寫すに使用せしが、この時代に至り、或は之を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文・漢詩の製作は朝廷の科擧に必要なる科目たりしに

關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築・彫刻・繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の強大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。

假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは清和・文德以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と之に對する賞翫とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

延喜の朝、紀貫之・凡河内躬恒等勅を奉じて萬葉集以後の歌をえらぶ。古今集是なり。古今の歌を取りて萬葉のに比

巧緻 巧妙ニシテ密ナルコト
勁健 ツヨクスグレテヰルコト

すればその內容を增加せること最も著し。是、佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の法も古今に至りては修辭上の進歩著しく、譬喩・緣語・かけ詞等最も巧妙に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今集は巧緻の境に進みて勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花・秋葉・雪月の美、歌に詠ずべき題目は多くこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の杜鵑、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴ふ禽獸もまたおのづから一定し、春の花の盛には人生の樂しき朝をおもひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の運命を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して後の文學は皆之に則るに至れり。

紀貫之　天慶九年(一六〇六)卒す年六十五。

紀友則　貫之の姪。生歿の年未詳。

初瀨に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿らで、ほどへて後にいたりければ、かの家のあるじ「かくさだかになんやどりはある。」といひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花ををりてよめる

紀貫之

人はいさ心も知らず、ふるさとは
花ぞ昔の香ににほひける。

櫻の散るをよめる

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日に、
しづ心なく花の散るらん。

僧正遍昭
寛平 年(一八九〇)寂す年七十五。

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちすばの濁りにしまぬ心もて、
何かは露を玉とあざむく。

題知らず　讀人不知

白雲にはねうちかはしとぶ雁の
かずさへ見ゆる秋のよの月。

内侍のかみ
尚侍藤原滿子。

右大將
右大臣右近衛大將藤原定國。滿子の兄。

凡河内躬恒
延喜七年(九〇七)歿す年四十九。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に書きたりける歌　凡河内躬恒

すみのえの松を秋風吹くからに、
聲うちそふる沖つしらなみ。

壬生忠岑
康保二年(九六五)歿す年九十六。

惟喬のみこ
寛平九年(八九七)歿す年五十四。

在原業平
元慶四年(八八〇)卒す年五十六。

寛平の御時后宮の歌合の歌　壬生忠岑

みよしの、山の白雪ふみわけて
入りにし人の音づれもせぬ。

惟喬(コレタカ)のみこの狩しける供にまかりて、宿りに歸りて、夜一夜酒を飲み物語をしけるに、十一日の月も隱れなんとしけるをりに、みこ醉ひて内へ入りなんとしければよみ侍りける　在原業平朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか、
山のはにげて、入れずもあらなん。

常陸歌

筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど、

君が御蔭にます蔭はなし。（古今和歌集）

その二　日記

貫之は和歌に於て久しく後世の模範たりしのみならず、國文を以て始めて和歌序を作り、勅撰集序を記し、又日記をものし、以て國文をして漢文と並行する地位に立たしむるに至れり。是、貫之の國文學に於ける殊功といふべし。就中土佐日記は、土佐守の任果てゝ京に歸りし海路の日記にして、自ら婦人に託して之を記せり。その文體簡朴にして輕妙、往々諧謔を交ふ。日記の巨擘と稱せらる。

紀貫之

八日　承平五年正月。

同じ處　土佐國大湊。大湊は浦戸灣の入口の邊か。

宇多の松原

八日、さはる事ありて、なほ同じ處なり。今宵の月は海にぞ入る。

那波の泊　土佐國安藝郡奈半利のあたり。

これを見て、業平の君の「山のは逃げて入れずもあらなん。」といふ歌なんおぼゆる。もし海邊にて詠まゝしかば、「波立ちさへて入れずもあらなん。」と詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人の詠めりける、

照る月の流るゝ見れば、天の川
出づるみなとは海にざりける。

とや。

九日、つとめて大湊より那波の泊を追はんとて漕出でけり。これかれ互に「國の境の内は。」とて見送りに來る人數多がなかに、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なん御館より出で給ひし日よりこかしこに追來る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々

の深き志はこの海にも劣らざるべし。これより今は漕離れてゆく。これを見送らんとてぞ此の人どもは追來ける。かくて漕行くまに〳〵、海のほとりにとゞまる人も遠くなりぬ、船の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、船にも思ふことあれど、かひなし。かゝれば、この歌を獨言にしてやみぬ。

思ひやる心は海をわたれども、
ふみしなければ、知らずやあるらん。

かくて宇多の松原を過ぎゆく。その松の數、いくそばく、幾千年經たりと知らず。本ごとに波打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして、船人の詠める歌、

見渡せば、松のうれごとに住む鶴は、
千代のどちとぞ思ふべらなる。

宇多の松原　土佐國香美郡岸本村宇田町の邊なるべしといふ。

とや。この歌は處を見るに、えまさらず。かくあるを見つゝ漕行くまに〳〵山も海もみな暮れ、夜更けて西東も見えずして、てけのこと、楫取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し、まして、女は船底に頭をつきあてゝねをのみぞなく。かく思へど、舟子、楫取は船歌うたひて何とも思へらず。その歌ふ歌、

春の野にてぞ音をばなく。
わが薄にて手をきる〳〵摘んだる菜を、
親やまほるらん、姑やくふらん。かへらや。
よんべのうなゐもがな。錢乞はん。

虚言をして、おぎのりわざをして、

錢も持て來ず、おのれだに來ず。

これなみに多かれど、書かず。これらを人のわらふを聞きて海はあるれど、心は少しなぎぬ。かくゆきくらして、泊に至りておきなびと一人、たうめ一人、あるがなかにこゝちあしみして、物もものしたまはでひそまりぬ。（土佐日記）

その三　物語

源氏物語五十四帖は紫式部の著す所なり。前篇は光源氏を主人公として、その得意の狀を寫し、後篇の宇治十帖は薫大將を主人公として、その失意の樣を敍す。全篇の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作たる所以は人物の描寫が活躍せると共に、自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點にあり。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。人事と自然とを融合せる詩的思想は是に至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。若し夫、散文としての外形より見んか、純國語として最も發達せる種種の形式を發見し得べし。故に和歌が古今集を以て模範文學となせるが如く、源氏物語は國文として後世の模範文學となれり。源氏の用語は恐らくは當時上流社會貴婦人の通用語なるべし。母音多く、敬語に富める國語の一層進歩せるものにして名詞・動詞の上にも敬語を用ふること極

めて多く、さらぬだに母音に富みて流麗なる國語なるが上に、漢語はすべて日本化せられて單音は重音となり、國語の中にも音便によりて子音を脱落せるもの頗る多し。にを・が等の接續的助辭を以ていくつとなくその句を連續しゆき、一文にして一頁に亙るもの亦稀有に非ず。嫋々として風に靡く野萩の花の如く、柔軟艶麗正にその内容に恰當せり。

心づくし　木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり。　讀人不知。

關吹越ゆる　旅人は袂涼しくなりにけり關吹越ゆる須磨の浦風。　在原行平。

紫式部

須磨の秋

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹越ゆる。」といひけん浦波よる〳〵はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものはかゝる處の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、打休みわたれるに、ひとり目をさまして枕をそばたてゝ四方の嵐を聞きたまふに浪たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりにけり。琴を少しかきならしたまへるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびて泣くねにまがふ浦波は
おもふ方より風や吹くらん。

と歌ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなう起き居つゝ、はなを忍びやかにかみわたす。「實にいかに思ふらん、我が身一つにより、親はらから片時立離れがたく程につけつゝ思ふらん家をわかれて、かく惑ひあへる。」とおぼすにいみじ

くて、いとかく思ひしづむさまを心細しと思ふらんとおぼせば、畫は何くれと戯言うちのたまひ紛らはし、徒然なるまゝに色々の紙をつぎつゝ手習をしたまふ。珍しきさまなる唐の綾などに様々の繪どもを書きすさびたまへる屏風の表どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語りきこえし海山の有様を遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、實に及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかき集めたまへり。この比の上手にすめる千枝・常則など召して、作繪を仕うまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき有様に、世の物思わすれて、近う馴れつかうまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。

前栽の花いろ〳〵咲亂れおもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御様のゆゝしう清らなること、處がらはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のなよゝかなる紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れたまへる御様にて、釋迦牟尼佛弟子と名のりてゆるゝかによみ給へるまた世に知らず聞ゆ。

沖より船どもの謠ひのゝしりて漕ぎゆくなども聞ゆ。ほのかに唯小さき鳥の浮べると見やらるゝも心細げなるに、雁の列ねて鳴く聲、楫の音にまがへるを打眺め給ひて御涙のこぼるゝをかきはらひ給へる御手つき、黑木の御數珠にはえ給へるは、故郷こひしき人々の心ち、皆慰みにけり。（源氏物語）

源氏物語と相並びて國文の雙璧と稱らへるゝものは清少納言の枕草子なり。枕草子の妙はその隨筆たる點にあり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を評し或は自ら誇り、或は皇后を褒め、閲讀の間多種の事件に遭遇して殆ど應接に遑あらず。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。文章の妙所も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花をいひ、忽ちにして小兒にうつり、又草花を點じ來り、再び人事に入り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず種々雜多に、想像の到るかぎり捕捉し來る。その變化轉換の妙即ち人を魅するに足るなり。枕詞・掛詞の妙味は元來人をして一事を思念せしめて直に他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は即ちその手段の最も發達せるものなり。或事柄に執着固定せずして一時に多方の興味を惹起す妙機を捉へ得たる所以は即ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。その點に於ては後世の俳家に似たる所あり。徒然草は枕草子を粉本とせるものなるが、その文章の變化は到底之に及ばず。頓智・機智を貴ぶは當時の和歌の贈答に於ける特徴として、當時の人の最も苦心せる所なり。清少納言は才氣奔放、當意即妙の才に富めり。その性質最もよく之に適したるものなり。語を換へていへば、直にその時代の性格を代表せ

る人物といふべし。その觀察の機敏なる、人の爲に言はんと欲する所を言ふ。亦得易からざる才筆なり。

春は曙

清少納言

春は曙。やう〳〵白くなりゆく山ぎは少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころは更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鴉のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛行くさへあはれなり。況いて雁などの列ねたるがいと小さく見ゆるいとをかし。日入りはて、風の音、虫の音などいとあはれなり。

冬は早朝。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白き。又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭持てわたるもいとつき〳〵し。晝になりて、ぬるく、ゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も白き灰がちになりぬるは、わろし。（枕草子）

その五　歴史

榮華物語は全篇四十帖、要は關白道長が一生の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは歴史物語といふにひとし。歴史と稱すといへども宮廷の歴史なり、後宮の歴史なり。この點に於ては、假構物語といくばくも異ならず。物語の名も亦ふさはしといふべし。文學上の價値より見れば、大鏡は遙に榮華の上にあり。大鏡は歴史と

して列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。その文や勁健にして筆端褒貶の意を含めるは疑ふらくは男子の作なるべし。この二者は藤原氏時代の最後の文學として藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。平安朝の世は平安の都の今を盛と榮えたる時にして上流の紳士は詩歌に音樂に舞蹈に風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕ふるは如何に優美なりけん。それらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。

菅原大臣

醍醐のみかどの御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原のおとゞほ右大臣の位におはします。そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下させ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけん、共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才もことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬことを出で來て、昌泰四年正月二十五月太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君・女君たち慕ひなきておはしければ、「小さきはあへなん。」と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣はさゞりけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かば、にほひおこせよ、梅の花、
あるじなしとて春なわすれそ。

又亭子の帝にきこえさせ給ふ、

流れゆくわれは水屐になりはてぬ、

亭子の帝　宇多法皇。亭子院は京都七條にあり。今廢る。

君しがらみとなりてとゞめよ。

なき事によりかく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆく〳〵と
隱るゝまでもかへりみしはや。

また播磨の國におはしましつきて、明石の驛といふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ

山崎　山城國乙訓郡山崎町。

夕べ遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば、野にも山にもたつけぶり、
　なげきよりこそもえはじめけれ。

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ、とびゆく雲の歸り來る
　かげ見るときぞなほ頼まるゝ。

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゝへる水の底までも、
　きよきこゝろは月ぞてらさん。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

大貳　太宰太貳藤原興範。

詩　丞相度レ年幾樂志、今宵觸レ物自然悲。摩寒絡緯風吹處、葉落梧桐雨打時。君富二春秋一臣漸老、恩無二涯岸一報猶遲。不レ知此意何安慰、飲レ酒聽レ琴又詠レ詩。

筑紫におはします處の御門もかためておはします。大貳の居處は遙なれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看二瓦色一、觀音寺只聽二鐘聲一。

これは『文集の白居易が『遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看』。といふ詩にもまさゞまに作らしめたまへり。」とこそ昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましゝとき、九月のこよひ內裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御

衣賜はせ給へりしを筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞそのをり思召し出でて作らせ給ひける、

去年今夜侍清凉、秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく人々感じ申されき。

かくて、このおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせたまひしぞかし。御歳五十九。（大鏡）

之を要するに、平安時代は前後四百年に亙り、古代文化の最も光彩ありし時代にして、江戸時代と共に我が國に於ける文學隆盛の二大時期とす。されど當時の文化は上流の社會に限られて一般の社會に及ばず、事物の發達すべて貴族的傾向を帶び、第宅衣服等實用を忘れて粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして綺麗を喜ぶ。從つて文學も物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の媒介として帝都上流の間に行はるゝのみ。下流の情態を寫したる作品は殆ど世に出でざりき。（國文學歷代選に據る）

藤岡作太郎
東圃と號す。國文學者。文學博士。東京帝國大學文科大學助教授。明治四十三年卒す年四十一。

一七 日本畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融してその區劃も明瞭ならざるに至るが如しと雖も、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや、その用意・筆法等に於て皆然り。彼にあ

りては、藝術と科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗力めて自然に背かざらんことを期し、此にありては、文化の精神的方面獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乘じて腦裏の印象を寫し出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通に空氣の色をも漏すことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官の客を引くが如く、一は幽閑なる茅屋に高士の梅を愛するに似たり。是等の差別は、蓋しその初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた西洋交通の歴史によりてこれを合一せんとする傾向あるなり。

法成寺 御堂關白藤原道長の創建。
法勝寺 白河天皇の創建。

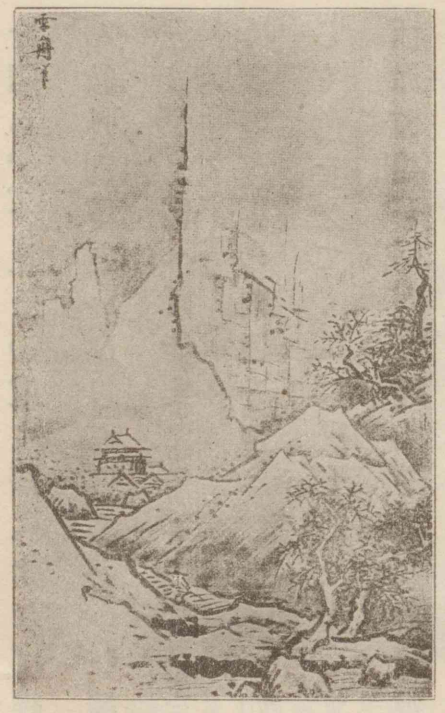
我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なるは多言を要せず。眞の美術史は聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だこれに伴はず　平安朝に巨勢金岡が出でし頃より漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は他に類例を見ず、佛教も亦形相の具足によりて内心の信仰に近づくべしとせり。法成寺・法勝寺の如き今廢墟をだに存せざれども、金堂・講堂・七寶莊嚴天を摩する大塔、虹と曳く廻廊

すべて一代の工を盡しゝ情態は歴史の傳ふる所、今に存する。鳳凰堂を見てもその一端を窺ふべし。香煙徐ろに薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に飜りて舞容風に勝へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして身は既に汚濁世界を離る。斯の如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀丹碧映射、その色は珊瑚・水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪飽くまで濃く飽くまで鮮かに、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脱なるものとは全くその選を異にしたるなり。

鎌倉時代の繪卷物も日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷

圓光大師法然上人。

等は源平鬪爭の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運を示す。何れも時代の反映にしてまた不朽の逸品たるを失はざれども、内容・外形共に根本の變化を受けたるは實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟の作その代表たり。此の革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑〻平安朝の



雪舟筆（現代の日本畫）

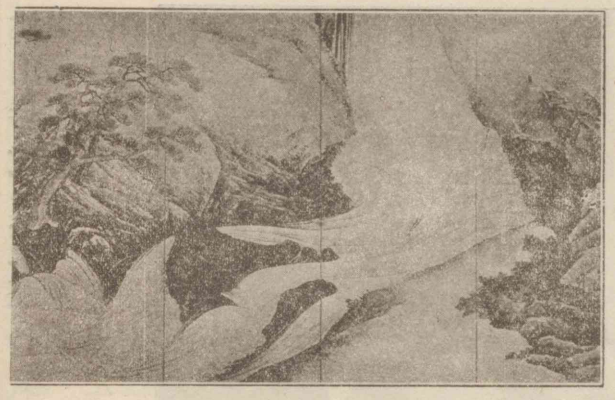
佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば物の美醜も眼を遮らず、一旦その道に悟入すれば經典・佛像何の要かあらん、教外別傳といひ以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく色を棄てゝ筆に託し、巧を拋ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、いよ〳〵味うていよ〳〵趣あり、恍惚として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は、豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至りて、幕府が消極の方針は更にその規模を縮めし枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野・住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫して山水花

狩野山樂筆策馬の圖（醍醐寺藏）

鳥以外に題目を求めたるは最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。

大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とするは則ち相似たり。應擧等の寫生畫は自然の摸寫に力めて別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脫の習を脫するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歷史畫の如きは即ち



圓山應擧筆　保津

岡倉覺三
美術鑑賞家。東京美術學校長。大正二年歿す年五十二

川の景　（西村總左衞門藏）

學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し此は彼の如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各〻盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かゝる中に明治の昭代は來れり。（東圃遺稿）

一八　狩野芳崖

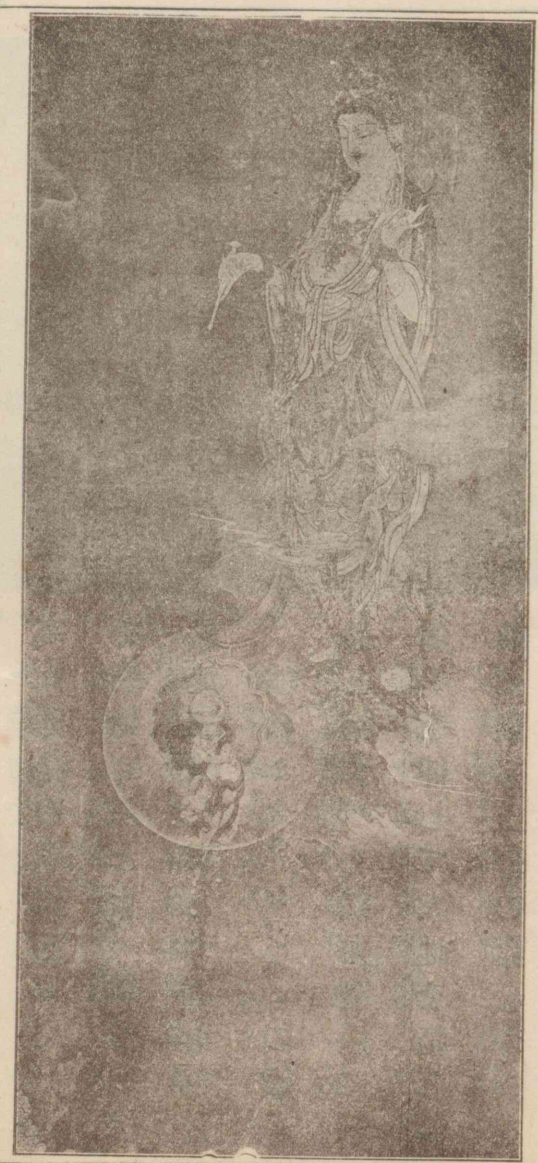
岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下

は則ち五慾昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は淸魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは無知淸淨にして餘念を懷かず、亂山突兀、暮雲暗澹、雪冷かに風荒る。憐むべし、呱々たる阿孺何くにか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨池に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼是芳崖狩野翁が畢生の傑作觀音大士の像なり。

翁嘗て人に語つて曰く、「人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。觀音は理想的の母なり。萬物を發生煦育する

大慈悲の精神なり。創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する、茲に年あり。未だ適當なる形相を得ず」と。

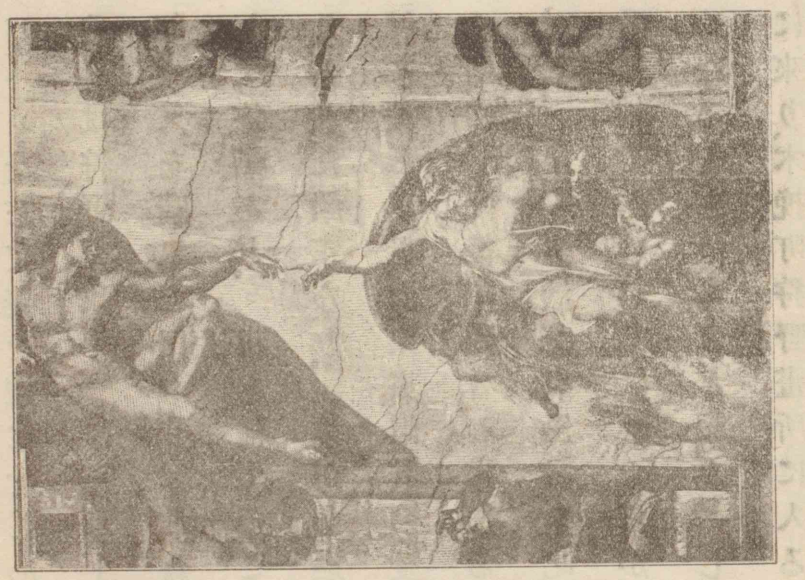


挿圖 狩野芳崖筆慈母觀音像。東京美術學校藏。

此の圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと纔に四日、畫き了へて、未だ欵を署するに至らざりしものなり。蓋

し翁平生の心事此の一幅畫中に留存するものあらん。其の筆墨の沈著淳厚にして、其の賦色の明麗雄渾なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尚秀絶なるに至りては、技、道に進むものにして、遙に古人を凌駕せんとす。尋常一樣、墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とするものと時を同じくして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造（クリエーション）の圖は歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る雲間の上帝隻手を伸して大地を指し、倏忽一個の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基敎造物

ミケランジェロ
伊太利の畫家。彫刻家。詩人。
（1475–1564）



ミケランジェロ作創造（羅馬シスト堂天井畫）

の大旨と異なる所あり。其の美術上の形相も亦隨つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐むべし此の超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下の名を成す能はずして空しく黃泉の客となれり。然れども翁の妙想は竟にミケラン

ジェロをして美を擅にせしめざりしなり。

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生る、幼名幸太郎。父を晴皐と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父、性豪果にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛錬による。母、溫柔貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念した る所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纒綿、曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも、亦故ありと謂ふべし。年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を

積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯はし、當時祕訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、嶷然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸城本丸燒失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。

當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自個の製作となすもあり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば雪舟の樹木巖石馬遠の蘆荻流

水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新按に係るものは纔に雲烟と落款とのみ。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。

一日童子あり、戲に虎を畫く。眼は是兩々の丸子、耳は是雙雙の遠山、足は是四竿の老竹、斑紋五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び、起舞して歎じて曰く、「是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦之に外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力滿盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや」と。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歲なりと云ふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し新畫の端緒を開きたるは亦奇緣といふべし。

心機漸く熟して、形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽にして奇僻に陷り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔らせて同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一歩を退かざりき。憾むらくは世を擧つて俗陋、翁を知る者甚だ罕なり。慘愴辛苦

嘗めざるなく、其の死に先だつこと兩三年始めて其の心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を成したる者の如し。觀音其の他の傑作に至つては畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。

翁人となり、內、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは鄕閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは一身節儉を守り、潤筆を得るも之を私せず、鄕里に送り、以て父母旦夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては虛心坦懷、好んで人に問ひ、門下子弟の說と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜して之を容れ、其の圖樣を改むること屢なり。其の自ら信じたる所を說くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡さゞれば歇まず。翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞法の筆法と同一なる所以を說き、得意の事得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、傍に人なきが如し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり、或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜

びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總て丹青鏡裏に照映して其の意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く畫訣となせり。翁常に言ふ、「人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教は美術宗あり。復何ぞ他に之を求めんや」と。亦以て其の造詣を見るに足るべし。（國華）

師範學校國文教科書本科用卷五終

言語

音韻の變化

第五編　言語

一　言語の發達

人の思想を他に通ぜんには顏つき・身ぶり・手まね又は符牒など種々の仕方もあれど、最も便利にして且精細なるは聲音による仕方なり。聲音を用ひて思想を表せるものを言語といふ。故に言語の內容は思想にして形式は聲音なり。この內容形式の一致せる處に言語は成立つものと謂ふべし。

然るに人は成るべく勞力を節約せんことを欲するものな

るが故に、發音も成るべくらくにらくにとする傾あり。これらの事情によりて音韻の變化は常に絶えず行はる。例へば「つきたち」が「ついたち」となり、「さしあげて」が「さゝげて」となるが如し。

意義の變化

文化の進むまゝに成るべく思想を精密に且適切に發表せんとするが故に、言語の内容も次第に制限變化せらる。

例へば「切る」といふ語の意義は、次の如く變化したるが如し。

一、刃物にて動物を斷ち切る。「魚をきる。」
二、事物を斷ち放す。「石をきる。」「緣をきる。」
三、限る。定む。「日をきる。」
四、果す。終ふ。「言ひきる。」
五、したむ。除く。「水をきる。」
六、横ぎる。「列をきる。」
七、兩替す。「紙幣をきる。」
八、骨牌など分配するために混ぜてあはす。「骨牌をきる。」
九、トランプにて切札を出して他の札を押へとる。「ハートにてきる。」

文字

かくの如く言語は音韻と意義と兩面より常に變化して止まざるものなれば、もし之をそのまゝに放任せんか、終には意義も多岐多端に分れて殆ど思想交換の用を辨ぜざるに至るべし。

然るに聲音は一時的のものにして永く保存すること難く、又その通ずる範圍も近距離に止りて遠隔の地に達し難く、時間空間兩方面より制限せらるゝ不便あるを以て、こゝに文字の發明起れり。而して文字は言語を永く遠く傳ふる便あるのみならず、又言語の變化に對して之を維持し保存する用をなすものなり。

かくて言語は一方に變化的勢力あり、一方に保持的勢力あ

言文一致

り、兩々相待つてこゝに發達進歩するものとす。

我が國、古代に固有の文字ありしか否か詳かならざれど、存在せる確證はなし。韓國傳來の漢字によりて國語を寫したれど、本來國語の性質に合はぬ處あれば、自ら假名文字の工夫ありこゝに假名交り文を一般に用ふることゝなれるなり。かくて國語を文字に寫すことゝなりて、奈良平安時代は言語文章ほゞ相一致したりしが、言語は性質上いつも文章より一歩早く變化しゆくものなるが故に、平安時代の末のころより言文次第に相離るゝ傾を生じ、鎌倉室町を經て江戸時代に至り次第に言語と文章とは遠ざかりゆき、遂に今日の如く言文相離るゝに至れり。然るに言文の甚だしく相異なるは不便の極みなれば、明治以來また言文一致の必要を感ずるもの多くなりて、近年は口語體の文章も亦

言文兩途

次第に盛行するに至れるなり。されど文語といひ口語といふも、本來全く別なるものにはあらず。今日文語と稱するものも或時代の口語なりと知るべし。

二　口語

上方言葉

今日我が邦に行はるゝ口語には二つの流あるが如し。一は東京を中心とする東國言葉なり。一は京都を中心とする上方言葉なり。上方言葉は古くより文化の中心たる近畿地方に發達したる語にして、以前は最も廣く行はれたるものなり。されど、今日にては文化の中心は東京にあり、東京語は全國に對して最も勢力あり、又洗煉せる口語となるべきはずなれば、東京の教育ある社會の口語は標準語となるべき資格を具へたるものと謂ふべし。現に國定小學讀

東國言葉

本の口語文はこの標準によりてものせるものなり。標準語に對して、或一地方に語らるゝ口語を方言といふ。されど嚴しき意味にては東京語も亦方言の一種なり。

今東國言葉と上方言葉との重なる差異を擧ぐれば左の如し。

1. 語幹の最後の音あ列なるハ行四段活用動詞の終止形連體形を、東國にてはアウ au と發音し、上方にてはオウ ô と發音す。

東國　手をアラウ。母をシタウ。ハウ子。

上方　手をアロウ。母をシトウ。ホウ子。

注意　文語にては洗ふ、慕ふ、這ふは上方風に讀むを常とす。

2. 文語四段動詞飽く・足る・借るを東國にては上一段に活用し、上方はそのまゝ四段に活用す。

東國　アキル、タリない。カリた。

上方　アク。タラん。カッた。

3. ハ行四段動詞の連用形より過去助動詞て・た・たりに續くとき、其の動詞を東國にては促音につめ、上方にてはウ音に發音す。

東國　どうイッテ。本をカッタ。

上方　どうユウテ。本をコウタ。

注意　買つた・借つたにて東西互に誤解を生ずることは屢見る所なり。東國の口語にては「借り」はラ行上一段活用なれば、促音便になることなし。

4. 形容詞の連用形の語尾を東國にてはそのまゝクと發音し、上方にてはウと音便にいふ。

東國　サムクなる。クルシク見える。

上方　サムウなる。クルシウ見える。

注意　東國にても「ござる」「存ずる」などが下に來るときに限り、ウ音便になる。

ョウございます。

有リ難ウ存じます。

5. 形容詞善し、好しの終止形・連體形を、東國にてはイヽといひ、上方にてはエヽといふ。

東國　それがイヽ。　イヽ、天氣。

上方　それがえヽ。　エヽ、天氣。

注意　國定讀本にては何れにも從はずョイを用ひたり。

6. 打消の助動詞を東國にてはナイ・ナイデ・ナカッタといひ、上方にてはン・イデ・ナンダと用ふ。

東國　知らナイ。　知らナイデ。　知らナカッタ。

上方　知らン。　知らイデ。　知らナンダ。

注意　東國にても對話語マスの打消には「知りませン」の如くンを用ふ。

又形容詞の打消には、上方にても寒うナイ、悲しうナイの如くナイを用ふ。

7. 動作の繼續を示すに東國はテイルを用ひ、上方はオルまたはテオルを用ふ。

東國　待つテイル。　漕いデイル。

上方　待つテオル。　漕いデオル。

待ちオル。　漕ぎオル。

從つて之を略して東國にては待つテル、漕いデルといひ、上方にては待ットル、漕いドル、待つチョル、漕イデョル、待ちョル、漕ぎョルといふことあり。この略語は、普通には之を用ひざるを可とす。

8. 指定の助動詞に東國にてはダ、上方にてはヂヤ又はヤを用ふ。

東國　どうダ。　こないダロウ。

上方　どうヂヤ。　こんヂヤロウ。

どうゃ。　こんゃロウ。

東國と上方との口語の特徴は大體上の八項に歸すべし。

されど言語の分布は種々の事情にて錯綜せるものなれば、上方に東國の語を用ふる處あり、東國に上方の語を用ふる處あり、截然たる區別は立て難きものと知るべし。

分界線

東國言葉と上方言葉との分界線はまづは立山・乘鞍岳・御岳等の山脈を以て本州を東西に界せる線なりといふを得べし。即ち越後・信濃・遠江以東は東國言葉の範圍にあり、越中・飛驒・美濃・三河以西は上方言葉の範圍に屬す。

この二大方言の外に九州の方言はまた自ら特徴あり。殊に動詞の活用に於て上二段・下二段の現存するが如きはその最も著しきものなり。

訛音

右は文法的に方言の比較を試みたるものなるが、音韻分布の上よりも方言を觀察することを得べし。即ち訛音なり。

この點よりいへば東北地方の發音は最も轉訛多くして矯正を要するものと認めらる。

シとス　ナシ(梨)　ナス(茄子)

チとツ　クチ(口)　クツ(靴)

イとエ　イト(糸)　エト(干支)

清音と濁音　ハタ(旗)　ハダ(肌)

その他東京の或社會にて火・引物のヒをシと發音し、上方にて質屋・敷物のシをヒと發音し、山陰道の或地方にては人・太のヒとフとを混同し、九州の或地方にて論語・ランプなどのラ行音をダ行音に發音するが如きも矯正すべき所なり。

拗音クワと直音カとを區別して菓子屋・貸屋をいひわけ、シ・ヂを區別して雉子・生地を言分くるが如き地方は頗る狹くなりたれば、これらの區別を發音上に要求することは難か

るべし。

沖繩語は遽かに之を聞けば、全く解し難き他國語の如くなれど、よく聞分くれば、全く內地語と同じ系統の語にして、一種の方言ともいふべし。而してその最も差異の著しきは音韻變化の甚だしきにあり。例へばエ列音をイ列音に、オ列音をウ列音に發するよりメ(目)をミ、ホ(帆)をフ、ネコ(猫)をニク、センゾ(先祖)をシンズといふが如し。

音勢

同じ音の語にても音の力の入れ處即ち抑揚(アクセント)によりて意義を異にするものあり。之を音勢といふ。例へば、

クモ　蜘蛛—雲
カマ　鎌—釜
カキ　垣—柿—牡蠣
ハシ　端—橋—箸

の如し。而してこれらの音勢は地方によりて同じからず、中には東國語と上方語とによりて反對なるもの少からず。

語彙の異同

是亦行く〳〵統一せざるべからざるなり。

この外、方言の中には一つの概念に對する語彙の全く異なるあり、「難波のあしも伊勢の濱荻」とはこの事なり。マムシといへば東國にては蝮なるを、上方にては鰻飯、ヒルといへば東國にては蛭なるを、上方にては鵞の意に用ふるが如きは語彙を異にするものなり。

用處の異同

又その意義は全く異なるに非ざれど、感じの著しく異なるものあり。例へばオマへといふ語は今日にては同輩若しくは目下に向つていふ對稱の代名詞なるを、處によりてはなほ目上に用ふる所あり、オカミサンといへば勞動者又は或商賈の主婦に用ふるが常なれど、これを上流の夫人に用ふる處もあるが如し。

之を要するに、方言は教育上政治上すべての點に於て統一

するを要するのみならず、殊に新領土を開拓し、新日本を擴張する上に標準語の確定は極めて重要なる一事業なるべし。

標準語は國定讀本の制度により、間接の結果として頗るその統一を促進し得るものゝ如し。なほ標準語文法・標準語辭典などを定めんことは今日に於て最も急務なりと謂ふべし。

同じ時代、同じ場所にても社會又は階級によりて多少特殊の用語あるものなり。學生の用語、軍人の用語、商人の用語、婦人の用語などそれ〴〵異なる所あるは誰も知ることなり。中古の宮廷貴族の間には「思ひたまへらるゝ」「おはしましぬべかめるを」など助動詞・テニハなどを連ねたる長き語句の多きこと物語・草子に著しく、武士の語には「よつびいてひようと射る」「さてはよき敵ござんなれ」などの如く短直促

迫の音多きこと軍記に見えたり。女房詞はその昔、宮中又は大名の奥などに奉仕せる女房の用語にて、今も婦人の用語となれるもの少からず。

鮓（すもじ）　杓子（しやもじ）　髪（かもじ）　湯巻（ゆもじ）　其方（そもじ）　ひだるし（ひもじ）

御恥かし（おはもじ）　御目に懸る（おめもじ）

右は語をあらはにいふを憚りてその一部をいひて全體を聞かせたるなり。その他

餅（かちん）（搗（かち））　豆腐（おかべ）　醤油（ひらさき）　鹽（なみのはな）

などいふも婦人用語なり。

語の不吉・不淨に聞ゆるを忌みて反對又はよき語を用ふる

隱語

ことあり、之を忌詞といふ。笏をシヤクといひ、蘆をヨシといひ、梨をアリノミといひ、擂鉢をアタリバチといふが如し。數詞の四に四人・十四日などシを避けてヨと發音するも亦この意なり。古くは病氣を歡樂といひ、葬儀を吉事といふことあり。齋宮にては、寺を瓦葺、僧を髮長などいひき。

或社會又は或團體の間に於て祕密に通信談話するための符牒樣の言語あり。之を隱語といふ。例へば僧侶の間には酒を般若湯、章魚を天蓋といふが如き、車夫の間には一をドテ、五をゲンコといふが如し。又盜賊の間には財布を與市、金時計を鶯といふが如き隱語少からず。なほ軍事上外交上の暗號などもやはり隱語の類なるべし。

師範學校 **國文教科書** 本科用卷五附錄 終

文部省檢定濟
大正八年一月十日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十二年三月三日訂正十二版發行
明治四十四年十一月十六日訂正十三版發行
明治四十五年二月九日訂正十四版發行
大正四年十月廿七日修正十五版印刷
大正四年十月三十日修正十五版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正五年一月十日修正十六版發行
大正七年十月廿七日修正十七版印刷
大正七年十月三十日修正十七版發行
大正八年一月二日修正十八版印刷
大正八年一月五日修正十八版發行

東京市小石川區高田老松町五十二番地
編者 吉田彌平
東京市神田區裏神保町六番地
發行者 上原才一郎
東京市神田區裏神保町六番地
發行所 光風館書店 (電話神田三千八十七番 振替口座東京三二七番)
東京市神田區裏神保町六番地
印刷者 四海民藏

定價 金四拾四錢
大正十一年度臨時定價 金八拾四錢

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

師範學校國文教科書 本科用 卷五

東京秀英舍第一工場印刷

所有 著作權

第一點作文採

（一）

今年の六高入學志願者より

は to し

猶ほ liking の譯語を知

似點」と譯したのが少々あつた。

（ハ）to preserve it from harm の it が最後の暗礁であつ

it を the love とせるもの、又は everything とせるもの澤山

り、「愛國心を害はぬやう」、「吾人の力に頼る處の 何物な

傷けぬやう」としてあつた。

些細の事乍ら（ニ）where our lives are passed を「生

を過した處」、「一生を了へた處」としたのが多數であつた、

密に申せば、一生を了へた以上は、死んだのだから、最早

他を愛することは不可能である、しかし右の解答者は必ず

英語解釋の第五問に就て　（落合貞三郎）